

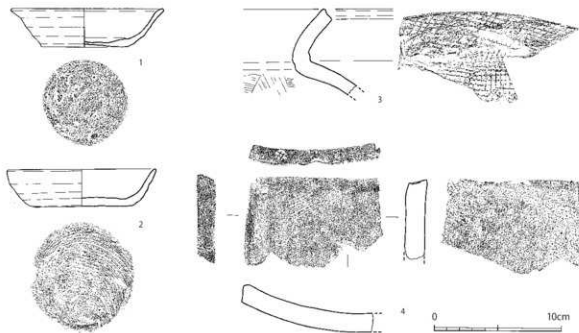
第7-146図 10-SK166出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK165出土遺物(第7-146図)

1・2は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。2・4は土師質土器杯で、これも底部外面に糸切り痕が認められる。5・6は京都産土師器皿Sの口縁部、7は吉備系土師器碗の底部である。8は連珠文軒平瓦で、万寿寺創建時に使用された瓦の一種である。9は丸瓦の玉縁部で、端面に「井」字状の刻印が認められる。10は滑石製石鍋の底部破片、11は用途不明の石製品である。

10-SK169

Y66区に位置する遺構である。その平面形態をみると、楕円形プランの土坑と溝状の遺構が重複しているように見えるが、両者を弁別することができていない。現状での規模は、東西20m、南北8.3m、深さ0.3～0.6mで、遺構の中央部付近は近年の擾乱で破壊されている。また、遺構検出時の所見では、15世紀代と推定している溝10-SD457を切って構築されている。出土遺物には14世紀代とそれ以前のものが多いが、遺構の切り合い関係の所見と矛盾する。以上のことから、遺構の年代については不明としておきたい。



第7-147図 10-SK169出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK169出土遺物(第7-147図)

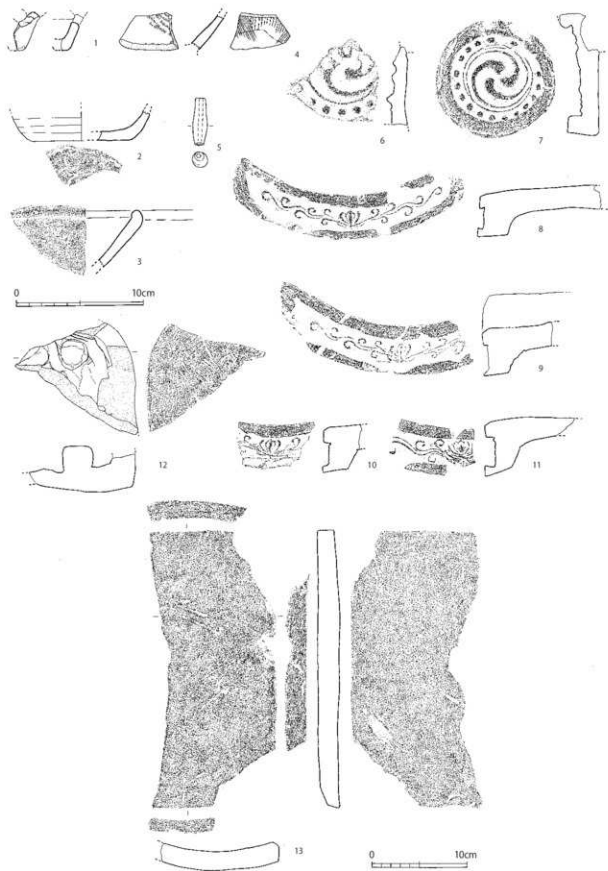
1は土師器坏で、底部はヘラ切り離しの後、ナデが行われている。口縁部は端部が外反する。8～9世紀代の製品と思われるため、混入品であろう。2は土師質土器の坏で、底部外面に糸切り痕と板状圧痕が認められる。3は東播系須臾器甕で、肩部外面に格子目叩きが認められる。4は平瓦で、端面に「井」字状の刻印がある。

10-SK170

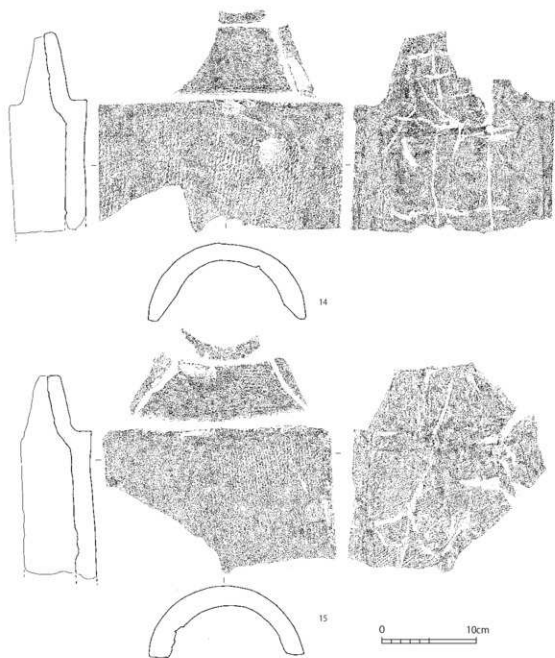
S66～T66区に位置する遺構で、遺構の平面形態は不整形である。その規模は東西6.2m、南北5.3m、深さ0.3mである。発掘時の状況からみると、複数の土坑が重複しているように見える。遺物も埋土全体から出土しているようにも見えるが、いくつかのまとまりがあるようにも見える。出土遺物には瓦片が多いが、土器や陶磁器などの破片も少量出土している。遺物については一括で取り上げてしまっており、この点からも遺構の重複状況を確認することができなかった。従って、遺構の年代は不明としておきたい。

10-SK170出土遺物(第7-148図・第7-149図)

1は瓦質土器香炉の脚部で、残存部の上端に貫通孔が設けられている。2は土師器坏の底部で、底部外面に糸切り痕の痕跡が残る。3は瓦質土器の播鉢もしくは鉢の口縁部である。残存部の内面には、播目が認められない。4は中国阿安窯系青磁碗の底部付近の胴部破片で、外面に櫛状工具による直線文、内面にジグザグ様の文様が施されている。5は管状土錘で、完形品である。6・7は軒丸瓦である。7は巴文の全形が観察できる資料で、瓦当文様は右回りの巴文となる。瓦当径はやや小型となり、尾部が細長く伸びる。珠文数は17個で、珠文間に隙間が生じている部位が認められる。8～11は軒平瓦で、8は瓦当文様の全形が観察できる資料である。12は鬼瓦の周縁部の破片で、円柱状の大きな珠文が施されている。13は平瓦、14・15は丸瓦である。14・15の凹面には布目痕や糸切り痕、吊り紐痕が認められる。丸瓦部の凸面には櫛縁と平行方向の縄目叩き、玉縁部の凸面には端縁と平行方向の縄目叩きが認められる。また、14・15は破断面が端面と平行していることから、玉縁付きの丸瓦を加工して、面戸瓦として使用された資料である可能性がある。



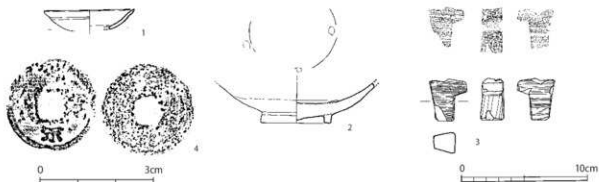
第7-148図 10-SK170出土遺物実測図① (1/3、1/4)



第7-149図 10-SK170出土遺物実測図② (1/4)

10-SK172

T65区に位置する大型の土坑で、遺構の平面形態は不整形である。その規模は東西約4.4m、南北約9.0m、深さ0.3～0.5mである。15世紀代の溝10-SD140や14世紀前半の土坑10-SK174と切り合い関係を有し、これらを切って構築されている。また、近年の擾乱を受けている地点も多く、遺構本来の形態や規模を確認することができていない。切り合い関係などから、遺構は15世紀代以降となるが、遺構の規模と比較して出土遺物は僅少である。そのため、遺構の詳細な年代は不明としておきたい。



第7-150図 10-SK172出土遺物実測図(1/3、1/1)

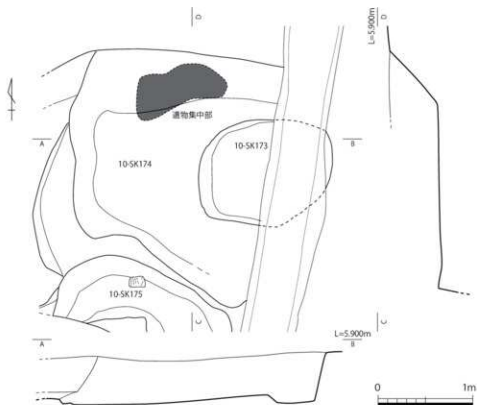
10-SK172出土遺物(第7-150図)

唐津焼
陶器類

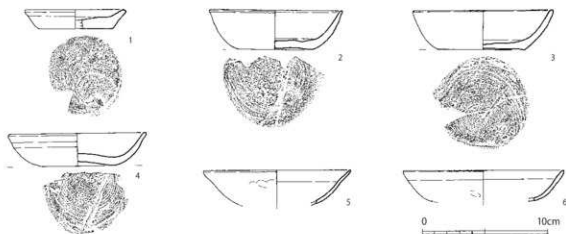
1は京都産土師器の皿で、底部を欠損する。2は唐津焼の陶器碗で、高台周辺は露胎となる。見込みには胎土目が認められる。1590～1610年代の製品である。当該遺物は近世に降る遺物であるため、遺構の年代を示唆するものであるかどうかは判断が難しい。3は滑石製品の破片で、石鍋を再加工したものである。4は初铸造年1038年の北宋銭「皇宋通寶」である。

10-SK174(第7-151図)

T65区に位置する土坑で、遺構の平面形態は不整形である。その規模は東西2.05m、南北約2.65m、深さ0.5mである。前述した土坑10-SK172と時期不明の土坑や近年の擾乱などが重複して構築されている。埋土中から土器片が出土しているが、出土遺物が遺構の北側に片寄った状態である。



第7-151図 10-SK174実測図(1/40)



第7-152図 10-SK174出土遺物実測図(1/3)

当該部分は遺構や攪乱が著しい地点であり、それに加えて周辺の土壌と遺構の埋土が類似していることから、発掘調査の結果が遺構の実態を示しているのかどうか、判断がつかない。しかしながら、その出土状態から、出土遺物の一括性は高いと考えている。以上のことから、出土遺物の一括性と年代観を重視して、遺構の年代はⅠ～Ⅱ期（14世紀前半～後半）に比定しておきたい。

10-SK174出土遺物（第7-152図）

1は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。2～4は土師質土器杯で、底部外面に糸切り痕、もしくは糸切り痕と板状圧痕が認められる。なお、これらの胎土には金雲母が少量含まれる。5・6は京都産土師器皿Sである。

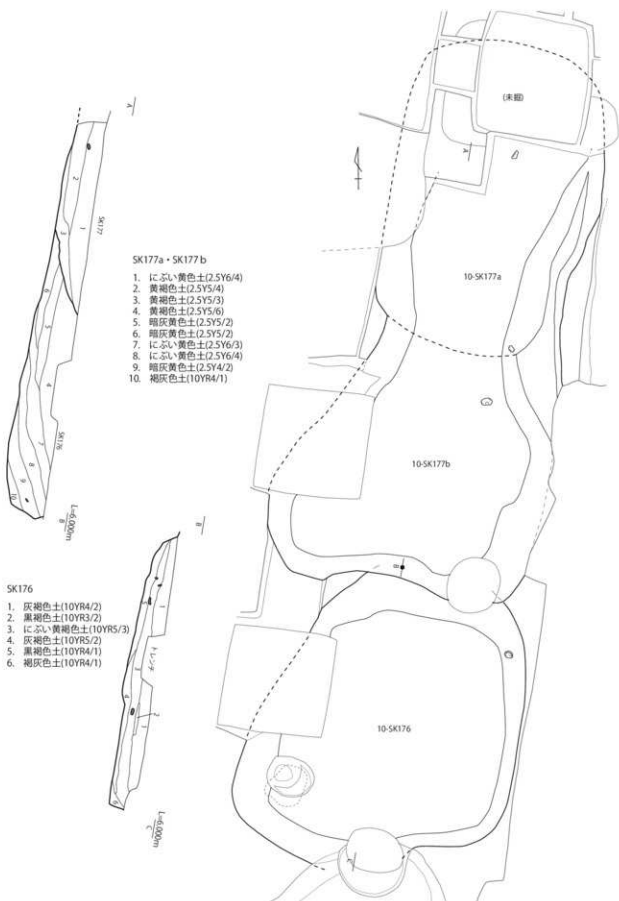
胎土に少量
の金雲母

10-SK176・10-SK177a・10-SK177b（第7-153図）

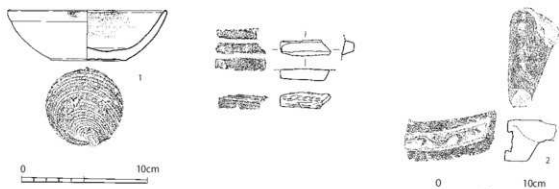
10-SK176はT65区に位置する大型の土坑で、遺構の形態は不整形円形を呈する。その規模は東西4.2m、南北4.6m、深さ0.5mである。周辺の大型の土坑と切り合い関係をもち、南側では10-SK166と北側では10-SK177bを切って構築されている。また、東側は近年の病院施設建物のコンクリート基礎によって破壊されている。遺構埋土は5層に分層され、上層には砂利を含む。土坑の規模に比して出土遺物は少量であるが、土器片や瓦片などがある。出土遺物の年代や切り合い関係から、遺構の年代はⅡ期（14世紀中葉～後半）に比定される。

10-SK177はT63区に位置する土坑である。検出当初は1基の土坑と考えていたが、掘り下げを進めると、少なくとも2基の大型土坑が重複していることが判明した。調査の過程で北側の土坑を10-SK177a、南側の土坑を10-SK177bとしたが、出土遺物は一括して取り上げてしまっている。

10-SK177aの規模は東西6.0m、南北5.0m、深さ0.5mで、遺構の北側と西側を近年の病院施設建物のコンクリート基礎によって破壊されている。南側は大型土坑10-SK177bと切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK177b→SK177aとなる。遺構埋土は3層に分層され、上層には1cm程度の礫や砂利をまだらに含む。10-SK177bの規模は東西4.3m、南北4.0m、深さ0.5mで、北側は10-SK177aと、南側は10-SK176と切り合い関係を有し、さらに西側を近年の病院施設建物のコンクリート基礎によって破壊されている。埋土は10層に分層され、上層には1～5cm程度の砂利を含む。10-SK177aと10-SK177bの遺物を一括して取り上げてしまったため、それぞれの遺構の詳細な年代は判定できないものの、出土遺物は14世紀前半以前のものに限られる。従って、遺構の年代はⅠ期（14世紀前半）に比定される。



第7-153図 10-SK176・10-SK177a・10-SK177b実測図(1/60)



第7-154図 10-SK176出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK176出土遺物(第7-154図)

1は土師質土器坏で、口縁端部にはススの付着が認められる。2は軒平瓦で、凹面に布目痕が残存する。3は滑石製品の破片で、石鍋の口縁部の鈎部であろう。

10-SK177出土遺物(第7-155図)

1は中国龍泉窯系鎔連弁文青磁碗で、底部を欠損する。13世紀代の製品。2～4は中国産白磁碗で、2・3は口縁部、4は底部である。5は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。6は京都産土師器と推定される製品である。7～9は土師質土器坏で、底部外面に糸切り痕、もしくは糸切り痕と板状圧痕が認められる。7は体部に丸味をもち、内面と口縁端部にススの付着が認められる。10は備前焼播鉢で、中世3a期(14世紀後半)の製品である。11、12は瓦質土器の土鍋で、11は「く」の字状に屈曲する口縁部、12は口縁部に鈎をもつ。13は瀬戸美濃産陶器の瓶で、底部外面に糸切り痕が認められる。14・15は有溝丸形土鍾で、14世紀前半の製品。16・17は砥石、18は鬼瓦の破片である。

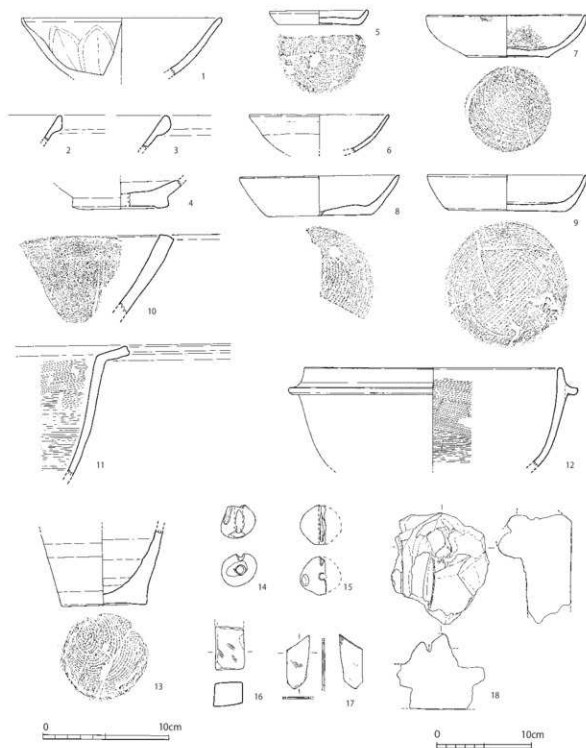
10-SK190

W66～X67区に位置する大型の土坑で、遺構の規模は東西8.0m、南北6.0m、深さ0.3mである。南側は調査区外に伸び、中央部付近は近年の攪乱によって上面を破壊されている。遺構が大型であることや北東側に東西約4.5m、南北約2.0mの集石が認められることから、複数の遺構をひとつの遺構として認識した可能性が高く、遺物も一括して取り上げてしまっている。出土遺物の中には主に15世紀代のものと16世紀後半代のものが混在している。出土遺物の中で、新しい様相の資料を重視して、遺構の年代はⅥ期(16世紀後半)に比定しておきたい。

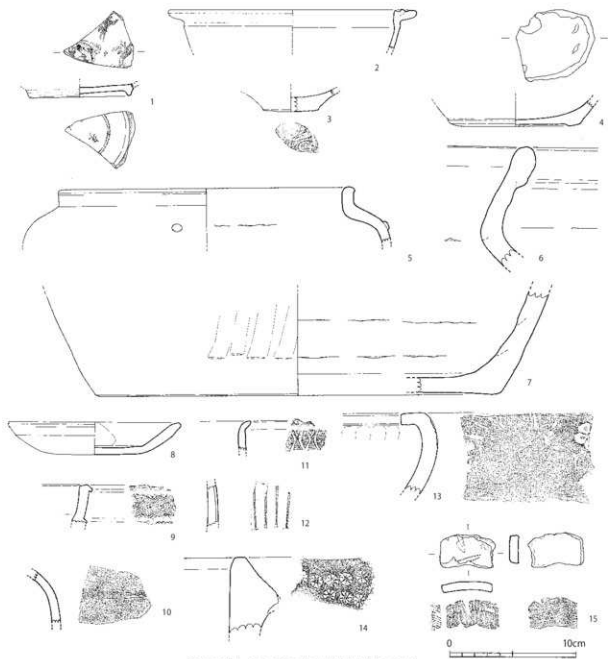
10-SK190出土遺物(第7-156図・第7-157図)

第7-156図1は中国景德鎮系青花皿で、見込みに魚藻文、外底部に銘款(「□□年□□」)を描く。2は中国南部産の焼締陶器鉢である。3は瀬戸美濃産陶器瓶で、外底部に糸切り痕が認められる。4は中国越州窯系青磁碗で、見込みに目跡がある。9世紀代の製品で、混入品であろう。5～6は備前焼の製品で、5は短頸壺、6は大甕の口縁部、7は大甕の底部である。5の外面には小さな円形の貼付文がある。8は京都系土師器皿で、器壁が厚い製品である。9～14は瓦質土器で、風舟または火鉢類である。15は滑石製品の破片で、断面に鋸引き状の条線が認められる部位がある。石鍋の再加工品である可能性が高い。

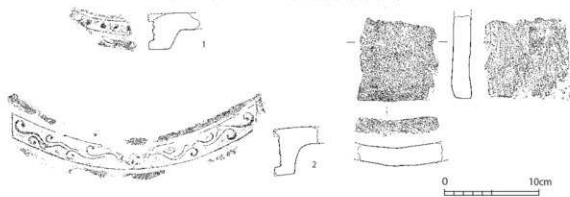
第7-157図1・2は軒平瓦で、16は連珠文軒平瓦、17は菱形唐草文軒平瓦である。3は銅銭で、一部を欠損する。



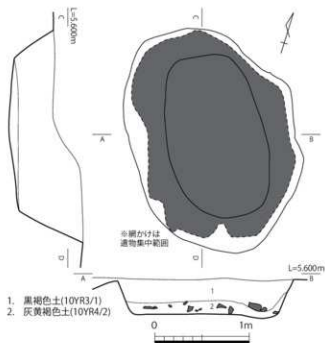
第7-155図 10-SK177出土遺物実測図(1/3、1/4)



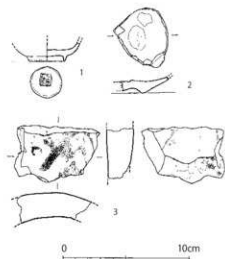
第7-156図 10-SK190出土遺物実測図① (1/3)



第7-157図 10-SK190出土遺物実測図② (1/4)



第7-158図 10-SK195実測図(1/40)



第7-159図 10-SK195出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK195 (第7-158図)

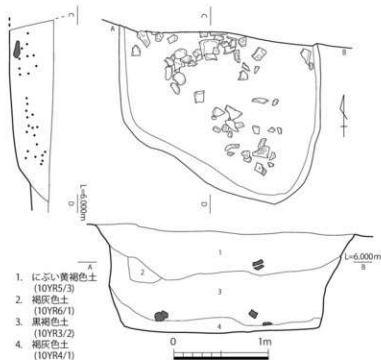
T61区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西1.7m、南北2.45m、深さ0.35mである。西側に隣接する土坑10-SK205と切り合い関係を有し、この土坑を切って構築されている。埋土は2層に分層され、それぞれの層に礫や瓦片が大量に含まれていた。瓦等の廃棄を主目的とした土坑と考えられるが、遺物の中に図化できる資料は少ない。出土遺物の中に、唐津焼が認められることから、遺構の年代はⅧ期(16世紀末)以降に比定される。

10-SK195出土遺物

(第7-158図)

1は中国景徳鎮系白磁小杯で、外底部に呉須で「福」字が描かれている。2は唐津焼の陶器皿で、見込みに胎土目が認められることから、1590～1610年代の製品である。3は丸瓦の破片であるが、凸面に赤色顔料の付着が認められる。

唐津焼
陶器皿



第7-160図 10-SK196実測図(1/40)

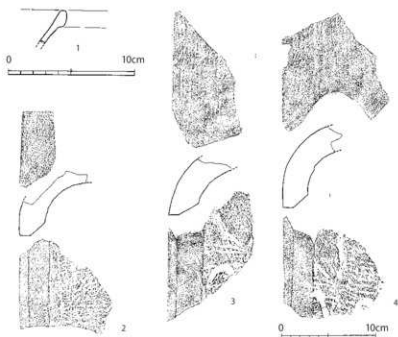
10-SK196(第7-160図)

R61区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西2.1m、南北1.7m、深さ1.05mである。北側は未

調査区に伸びる。埋土は4層に分層され、底面よりやや浮いたレベルから、瓦片などが出土した。遺物は瓦類が主体となり、その中に遺構の詳細な年代を示唆するような資料はない。従って、遺構の年代は不明である。

10-SK196出土遺物 (第7-161図)

1は中国産白磁碗で、口縁端部が玉縁状になる。2~4は丸瓦で、凸面に縄目叩き、凹面に布目痕と吊り紐痕が認められる。



第7-161図 10-SK196出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK201

Q61区に位置する土坑で、遺構の形態は半楕円形状を呈する。第10次調査区で検出した遺構の規模は東西4.5m、南北0.8m、深さ0.4mで、南側は第8次調査区に伸びる。その位置関係から、第8次調査区で報告した08-SK051と同一遺構である可能性がある。第10次調査区の10-SD055、第8次調査区の08-SD068および08-SD168を切って構築されている。検出面から埋土上位より瓦片、土器片、礫などが出土した。瓦片の中には被熱して赤変したものも多い、また埋土中には、白色の小礫も混入している。16世紀後半の溝などを切って構築されていることなどから、遺構の年代はⅤ期(16世紀末)に比定される可能性が高い。

10-SK201出土遺物(第7-162図)

図示した遺物は、土師質土器小皿である。底部外面には糸切り痕がわずかに残存する。



第7-162図 10-SK201出土遺物
実測図(1/3)

10-SK204

S66区に位置する土坑で、その規模は東西2.8m、南北1.7m、深さ0.3mである。遺構の南側は調査区外に伸びるが、当該地点は遺構の切り合いが激しく、それぞれの埋土が類似していたため、遺構の形態などが正しく把握できたどうかは判断がつかない。埋土からは瓦片を主体とした遺物が一定量出土したが、図示可能な遺物は少ない。遺構の年代は不明としておきたい。

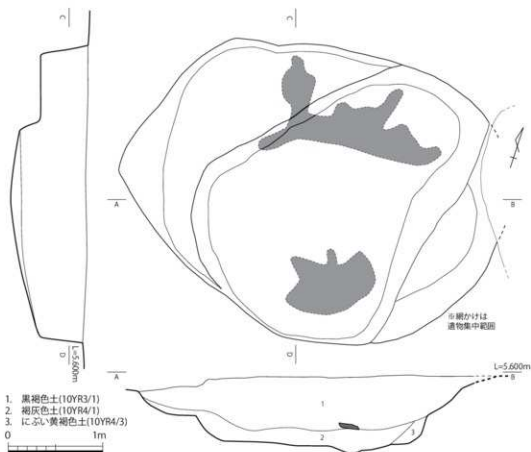
10-SK204出土遺物(第7-163図)

図示した遺物は青磁碗の口縁部で、15世紀代の製品である。



第7-163図 10-SK204出土
遺物実測図(1/3)

08-SK051
と同一遺構



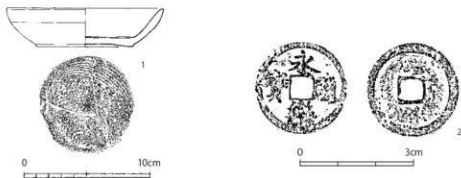
第7-164図 10-SK205出土遺物実測図 (1/40)

10-SK205 (第7-164図)

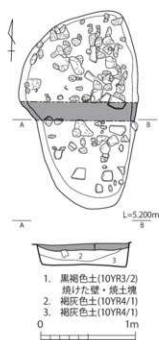
T61区に位置する土坑で、遺構の形態は略楕円形を呈する。その規模は東西3.9m、南北3.0m、深さ0.8mである。西側に隣接する土坑10-SK195と切り合い関係を有し、この土坑から切られている。完掘状況や土層をみると、2つ以上の土坑が重複しているようにみえるが、そのことを検証することはできていない。埋土は3層に分層され、それぞれの層に礫や瓦片が大量に含まれていた。瓦等の廃棄を主目的とした土坑と考えられるが、遺物の中に固化できる資料は少ない。瓦のほか、銅銭や土師質土器坏なども出土している。遺構の詳細な年代を示唆する資料は乏しいが、出土遺物の中に永楽通寶が含まれていることから、その年代は15世紀以降に比定される。

10-SK205出土遺物 (第7-165図)

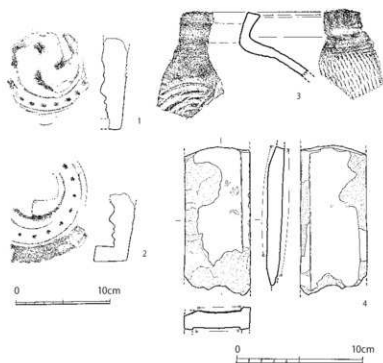
1は土師質土器坏で、14～15世紀代の製品。2は初鑄造年1408年の明銭「永楽通寶」である。



第7-165図 10-SK205出土遺物実測図 (1/3, 1/1)



第7-166図 10-SK206実測図(1/40)



第7-167図 10-SK207出土遺物実測図(1/4、1/3)

10-SK206 (第7-166図)

R66区に位置する土坑で、遺構の平面形態は不整形である。現状での規模は東西1.2m、南北2.1m、深さ0.24mを測る。遺構の周辺には焼土や被熱した瓦片などが分布しており、これらの分布範囲内の僅かな土壌の違いを遺構として認識したが、SK206とした遺構である。しかしながら、遺構内の埋土と同じ性状の土壌が遺構外にも分布しており、本遺構の検出プランと掘り下げ状況が正確なものだったのかどうかについての判断がつかない状況である。遺構とその周辺は、遺跡の保存が決定したため、これ以上の掘り下げを実施せず、保全している。以上のような経緯から、遺構の詳細な年代は不明としておきたい。

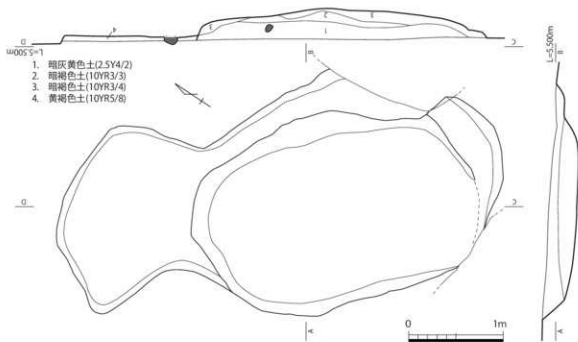
10-SK206出土遺物 (第7-167図)

1・2は巴文軒丸瓦の破片である。3は東播系須恵器の甕で、胴部外面に平行叩き、内面に同心円当具痕が認められる。4は輝緑凝灰岩製の石材を使用した硯である。

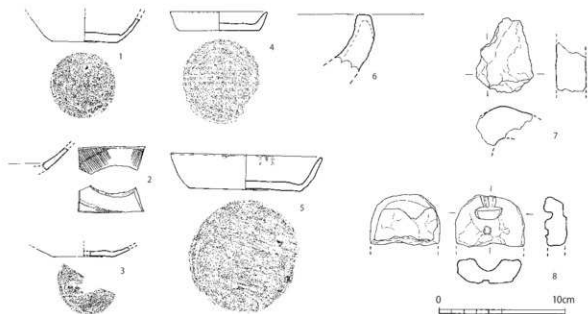
10-SK207 (第7-168図)

R66区に位置する土坑である。検出当初から、2基以上の遺構が重複していたことを認識していたが、調査時の不手際から、2基の遺構を同時に掘り進めてしまった。南側の遺構は、楕円形プランの土坑で、その規模は東西2.0m、南北3.1m、深さ0.3mである。埋土には礫や瓦片、炭化物などを含む。図示した遺物はすべてこの土坑の埋土から出土した。出土品の中に、少数ではあるが、鋳型や輪、取瓶など鋳造関係の遺物があることが注意される。そのほかの遺物は大半が14世紀代以前のものであるが、15世紀代の遺物が少量混入している。遺構の時期を判定するのは難しいが、出土遺物の年代観より、遺構の年代はⅡ期(14世紀中頃～後半)に比定しておきたい。

鋳造関係の
遺物



第7-168図 10-SK207実測図 (1/40)



第7-169図 10-SK207出土遺物実測図 (1/3)

10-SK207出土遺物 (第7-169図)

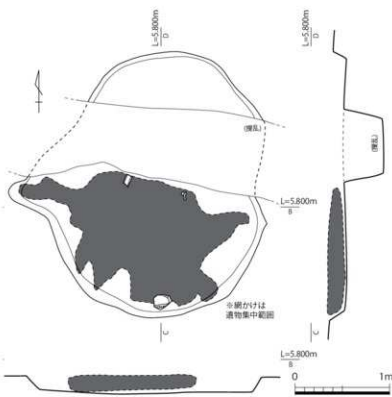
1は中国産白磁で、口縁部を欠損するが、いわゆる口剥げの口縁となる皿である。13世紀後半代の製品。2は中国同安窯系青磁碗の胴部過半部の破片で、12世紀代の資料である。3は周防産(大内系)と推定される土師質土器皿で、当該資料のみが15世紀代の製品となる。4・5は在地系の土師質土器で、4は小皿、5は坏で、いずれも外底部に糸切り痕と板状圧痕が認められる。14世紀後半に比定される。6は取瓶の口縁部で、破片であるが、かなりの大型の製品になる可能性がある。7は輪の胴部破片である。8は用途不明の土製品であるが、湯口と思われる部位などが認められるため、鋳型である可能性が考えられる。

銅型

10-SK213

(第7-170図)

V66区に位置する土坑で、遺構の平面形態は不整形である。その規模は東西2.7m、南北1.8m、深さ0.2mを測る。遺構のほぼ中央を近年の攪乱により破壊されている。出土遺物の大半が瓦片で、攪乱より南側に集中し、北側からは出土しなかった。瓦の中には、被熱により赤変しているものも認められる。瓦の他には、瓦質土器の破片などが少量認め



第7-170図 10-SK213実測図 (1/40)

られた。遺構の詳細な時期を示す資料は乏しいが、出土遺物の様相から、遺構の年代はⅢ・Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定される。

10-SK213出土遺物 (第7-171図・第7-172図)

1は瓦質土器の風炉または火鉢と思われる胴部の破片で、残存部の中央に断面三角形の突帯を有し、外面には菊花文・巴文を連続して押捺する。15世紀代の製品である。2～13は瓦埴類である。2～6は軒平瓦、7・8は軒丸瓦、9は鬼瓦、10～13は平瓦である。平瓦には凹面に糸切り痕(コビキ痕)が観察できる資料がある。なお、13は平面観が長方形であることから、鬘斗瓦である可能性が高い。側面の一方は分割破面のままとまっている。

鬘斗瓦

10-SK215 (第7-173図)

U66区に位置する土坑で、遺構の平面形態は不整形である。その規模は東西3.0m、南北2.6m、深さ0.15mを測る。遺構の南縁部を近年の攪乱により破壊されている。出土遺物の大半が瓦片で、遺物は土坑のやや西側に集中して出土した。瓦の中には、被熱により赤変しているものも認められる。また、出土遺物の中に瓦塔の破片があり、注目される。土器や陶磁器はほとんど出土していない。遺構の詳細な時期を示す資料は乏しく、遺構の年代は不明である。

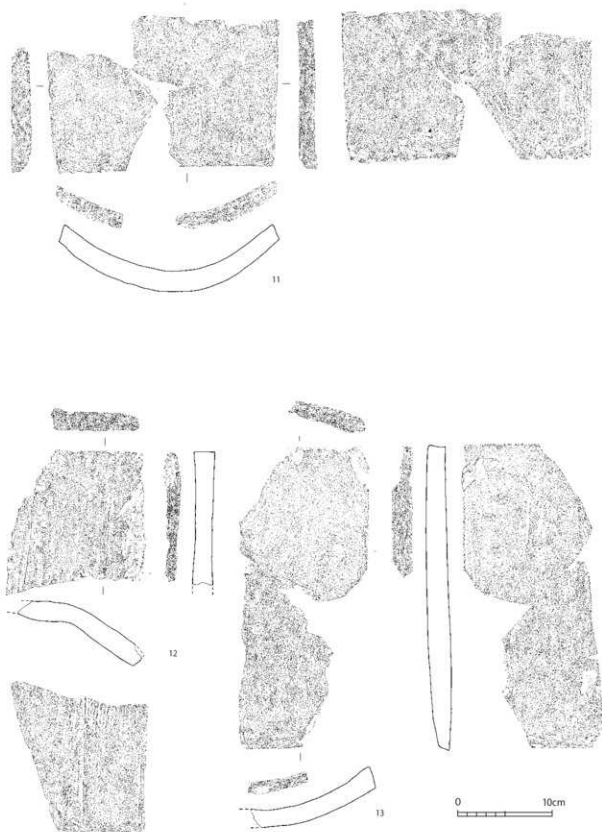
10-SK215出土遺物 (第7-174図)

1は瓦塔で、屋根部の破片である。残存部には軒丸瓦・軒平瓦・尾垂木などの表現がみられる。2～4は軒平瓦である。

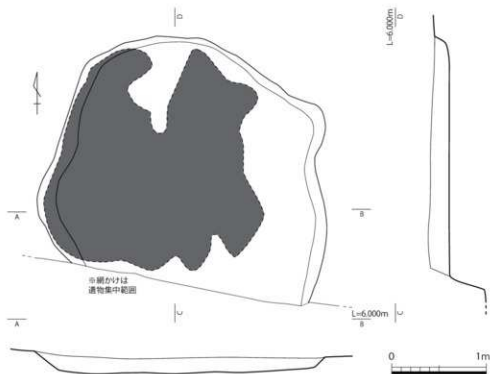
瓦塔



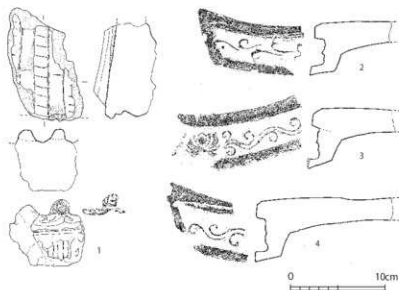
第7-171図 10-SK213出土遺物実測図①(1/3)



第7-172図 10-SK213出土遺物実測図



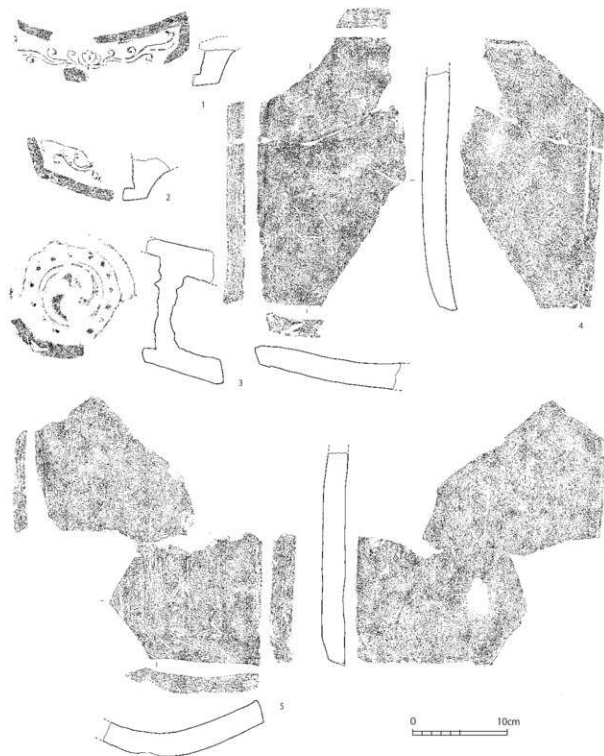
第7-173図 10-SK215実測図 (1/40)



第7-174図 10-SK215出土遺物実測図 (1/3、1/4)

10-SK216

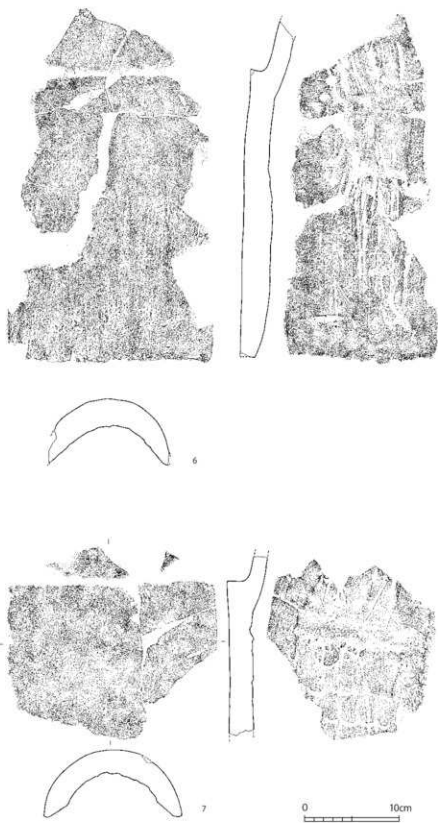
Q61区で検出した遺構で、径約1mの範囲に礫や瓦が集中して出土した。本来、小型の廃棄土坑だったと推定されるが、遺構のプランを検出することができなかった。出土した瓦の中には、被熱して赤変したものも認められる。図示可能な遺物は瓦のみで、遺構の詳しい年代を判別できる資料はない。そのため、遺構の年代は不明である。



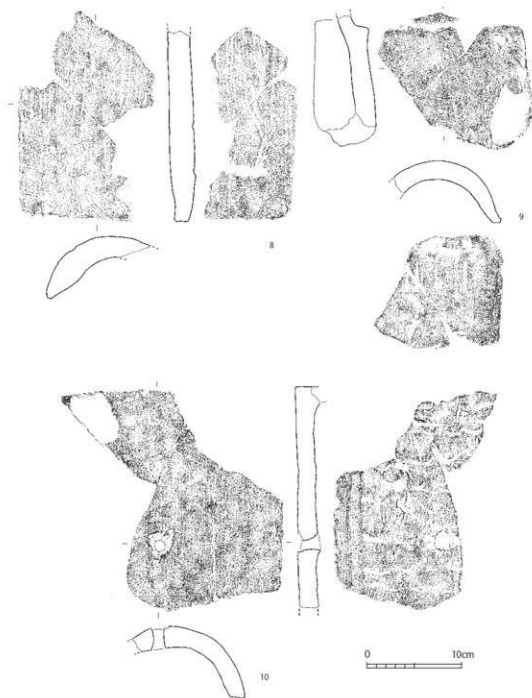
第7-175図 10-SK216出土遺物実測図①(1/4)

10-SK216出土遺物 (第7-175図～第7-177図)

1・2は軒平瓦、3は鳥衾瓦の破片である。3の鳥衾瓦には瓦当部が残存しており、瓦当文様は巴文となる。4・5は平瓦で、6～10は丸瓦である。丸瓦の中には、九州型吊り紐痕が観察できる資料(7・10)がある。また、10の体部には釘穴が設けられている。



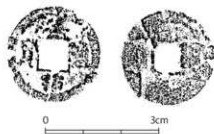
第7-176図 10-SK216出土遺物実測図② (1/4)



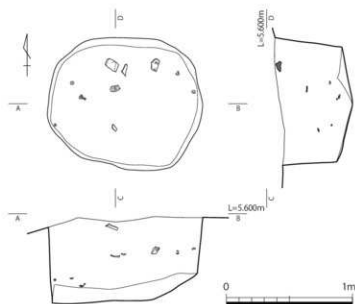
第7-177図 10-SK216出土遺物実測図③ (1/4)

10-SK217

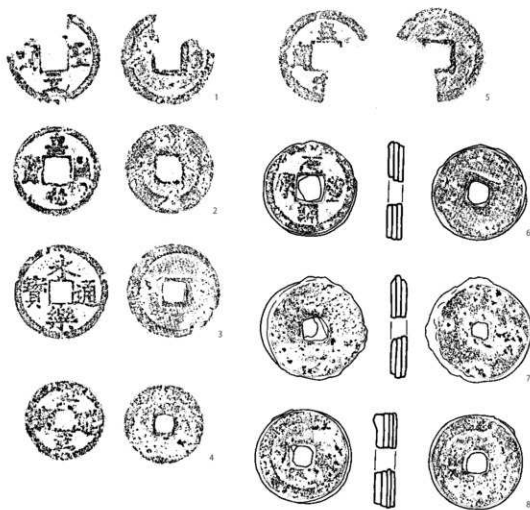
U65区に位置する土坑で、遺構の形態は楕円形状を呈する。その規模は東西1.0m、南北1.2mを測る。遺構の保全のため、掘り下げを実施しておらず、深さは不明である。南側は14世紀中頃～後半の土坑10-SK207と切り合い関係を有し、SK207に切られている。北側は近年の攪乱によって破壊されている。検出面から銅銭が1枚出土した。未掘のため遺構の



第7-178図 10-SK217出土遺物実測図 (1/1)



第7-179図 10-SK222実測図 (1/30)



第7-180図 10-SK222出土遺物実測図 (1/1)

年代は不明であるが、遺構の切り合い関係からはⅡ期（14世紀中頃～後半）以前に遡る可能性も考えられる。

10-SK217出土遺物（第7-178図）

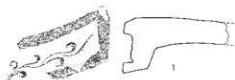
図示した遺物は、銅銭である。鋳出により、銭文は判読できない。

10-SK222（第7-179図）

AB62区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西1.2m、南北1.05m、深さ0.65m測る。14世紀の井戸10-SE459と切り合い関係を有し、この井戸を切って構築されている。埋土中には土器・瓦の小破片を含み、埋土中位から下位にかけては銅銭が複数枚出土した。銅銭には緋の状態となったものはなかったが、3～4枚が錆着しているものが認められた。当該遺構の周辺に位置する溝10-SD223や10-SD045の埋土中からも銅銭が一定量出土しており、これらの遺構と関連がある可能性も考えられる。銅銭の他には、図示可能な遺物はない。遺構の詳細な年代は不明であるが、出土遺物の中に永楽通寶が認められるため、少なくとも15世紀以降に比定される。

10-SK222出土遺物（第7-180図）

1～8は銅銭で、このうちの大半は北宋銭であるが、3は初鑄造年1408年の明銭「永楽通寶」である。また、6～8は3～4枚が錆着している資料である。

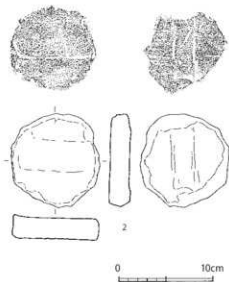


10-SK224

P66～Q66区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西3.0m、南北2.0m、深さ0.35m測る。埋土中から瓦片が少量出土している。出土遺物が僅少なため、遺構の年代は不明である。

10-SK224出土遺物（第7-181図）

1は軒平瓦の破片である。2は用途不明品で、瓦片を円形に再加工した製品である。



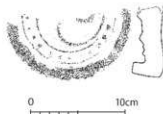
第7-181図 10-SK224出土遺物実測図(1/4)

10-SK226

P66区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西1.1m、南北1.2m、深さ0.35m測る。埋土中から瓦片が少量出土している。出土遺物が僅少なため、遺構の年代は不明である。

10-SK224出土遺物（第7-182図）

図示した遺物は、巴文軒九瓦の破片である。図示可能な遺物は、この資料1点に留まる。

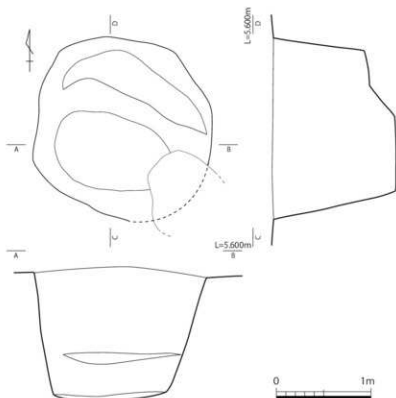


第7-182図 10-SK226出土遺物実測図(1/4)

10-SK232

(第7-183図)

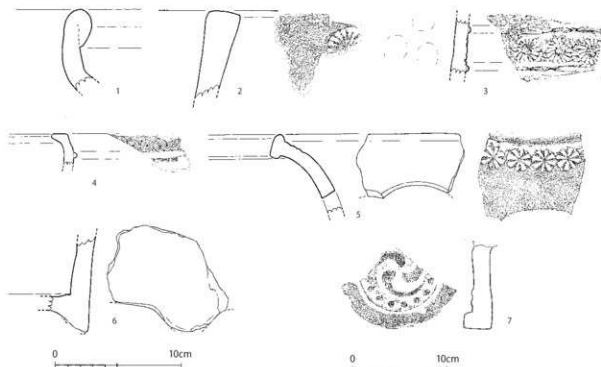
X63区に位置する土坑で遺構の平面形態は略円形を呈する。その規模は東西0.85m、南北0.9m、深さ0.65mである。12～13世紀代の井戸SE440と切り合い関係を有し、この井戸を切って構築されている。埋土中から瓦質土器や瓦片が少量出土している。出土遺物は僅少であるが、切り合い関係や出土物より、遺構の年代はⅢ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定しておきた。



第7-183図 10-SK232実測図(1/40)

10-SK232出土遺物(第7-184図)

1は備前焼大甕の口縁部破片である。2～6は瓦質土器風炉または火鉢で、2～5の外面には刻印による文様が押捺されている。7は巴文軒丸瓦の破片である。



第7-184図 10-SK232出土遺物実測図③(1/3, 1/4)

10-SK236

AC66区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西1.5m、南北2.0m、深さ0.25mである。遺構の攪乱が多く、北側は近年構築された溝によって完全に破壊されている。埋土から瓦質土器や備前焼などが少量出土した。遺構の性格は廃棄土坑であろう。出土遺物には15世紀代と16世紀代の遺物が混在しているが、新しい時期の遺物を重視して、遺構の年代はV期(16世紀前半)に比定しておきたい。

10-SK236出土遺物(第7-185図)

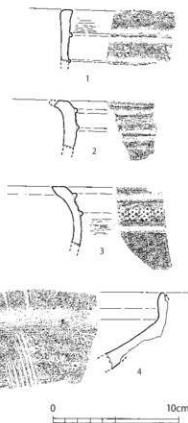
1～3は瓦質土器火鉢で、外面には刻印による文様が押捺される。15世紀代の製品。4は備前焼で、中世6期(16世紀前半)に編年される製品である。

10-SK239(第7-186図)

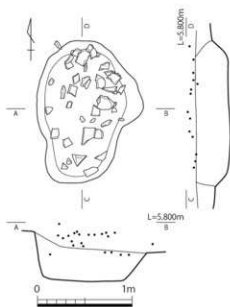
R61区に位置する小型の土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西1.1m、南北1.5m、深さ0.5mである。検出上面から埋土上位にかけて、瓦や土器片などが出土した。遺物は浮いた状態であり、埋土下位から底面にかけては出土していない。瓦の中には被熱により赤変したものもある。出土遺物から、遺構の年代はⅢ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定される。

10-SK239出土遺物(第7-187図)

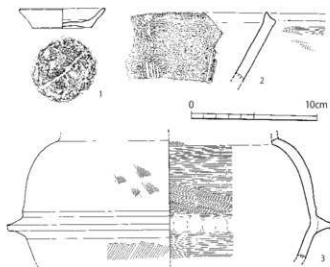
1は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が残存している。2は瓦質土器播鉢の口縁部、3は瓦質土器羽釜の胴部である。



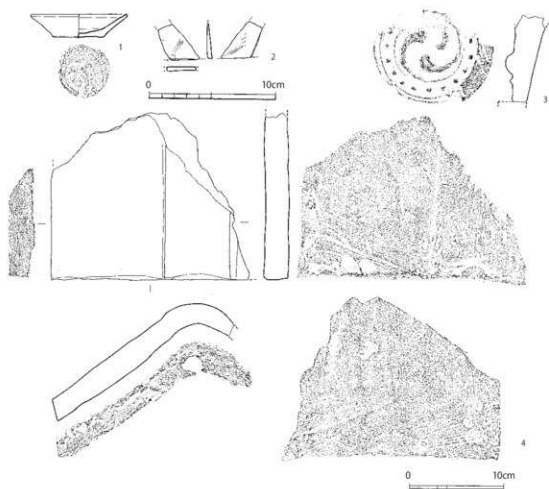
第7-185図 10-SK236出土遺物実測図(1/3)



第7-186図 10-SK239実測図(1/40)



第7-187図 10-SK239出土遺物実測図(1/3)



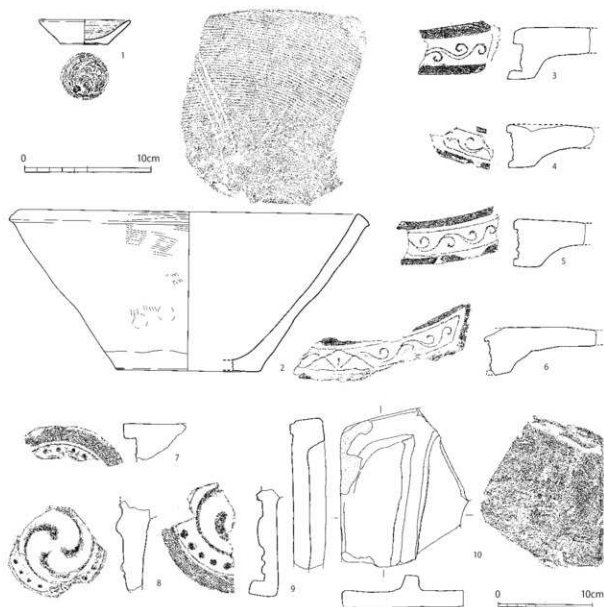
第7-188図 10-SK253出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK253

R66区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。遺構の埋土と周辺土壌が類似しているため、遺構の形態や規模を正確に把握できているかどうかかわからないが、その規模は現状で東西3.0m、南北3.5m、深さ0.3mを測る。調査時の所見では、西側に隣接する溝10-SD090(10-SD100)と切り合い関係をもち、当該遺構に切られているとされているが、溝10-SD090(10-SD100)は14世紀前半の遺構であるため、出土遺物からの所見と矛盾する。また南東側は時期不明の土坑から切られている。R66区は道路施設建設で遺構面が破壊されるため、当該部分については完掘したが、遺構の北側は保存のため未掘となっている。埋土中からは土器片や瓦片などが出土した。出土遺物から、遺構の年代はⅣ期(15世紀後半)に比定される。

10-SK253出土遺物(第7-188図)

1は土師質土器小皿で、底部外面には糸切り痕のみが認められる。胎土は赤褐色を呈する在地系の製品である。口縁部がラッパ状に開く形態を呈することから、15世紀後半に比定される。2が砂岩を素材とする砥石の破片である。3は軒丸瓦で、瓦当文様は左周りの巴文である。瓦当径がやや小振りとなる資料である。4は雁振瓦の破片である。



第7-189図 10-SK254出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK254

R66～S66区に位置する土坑で、遺構の平面形態は不整形となる。その規模は現状で東西5.1m、南北3.9m、深さ0.3mを測る。遺構の埋土と周辺土壌が類似しており、遺構の完掘状況を見ると、明らかに複数の遺構が重複しているが、個々の遺構の形態や規模を正確に把握することができなかった。上記のような状況から、出土遺物には複数の遺構からの遺物が混在している可能性が高い。出土遺物の中に15世紀代の土師質土器などが認められることから、遺構の年代はⅣ期（15世紀後半）に比定しておきたい。

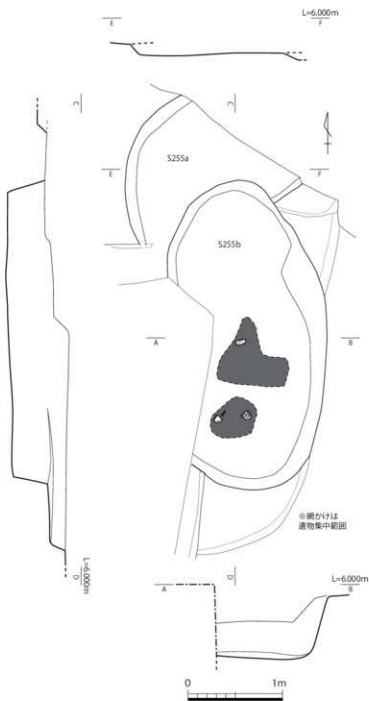
10-SK254出土遺物（第7-189図）

1は土師質土器小皿で、底部外面には糸切り痕が認められる。口縁部がラッパ状に開く形態を呈することから、15世紀後半に比定される。2は瓦質土器播種鉢で、内面に刷毛目状の調整と3条を一単位とする播目が認められる。3～6は軒平瓦、7～9は軒丸瓦である。10は瓦埵類と推定される製品で、鬼瓦の破片であろうか。

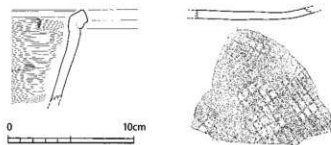
10-SK255a・10-SK255b(第7-190図)

V61～V62区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形となる。検出当初は1基の土坑と認識していたが、完掘すると複数の土坑が重複していたことが明らかになった。出土遺物が認められた北側の土坑を10-SK255a、中央の土坑を10-SK255bとして、遺物の取り上げを実施したが、土層観察や出土遺物から、これらの土坑の前後関係を明らかにすることはできていない。

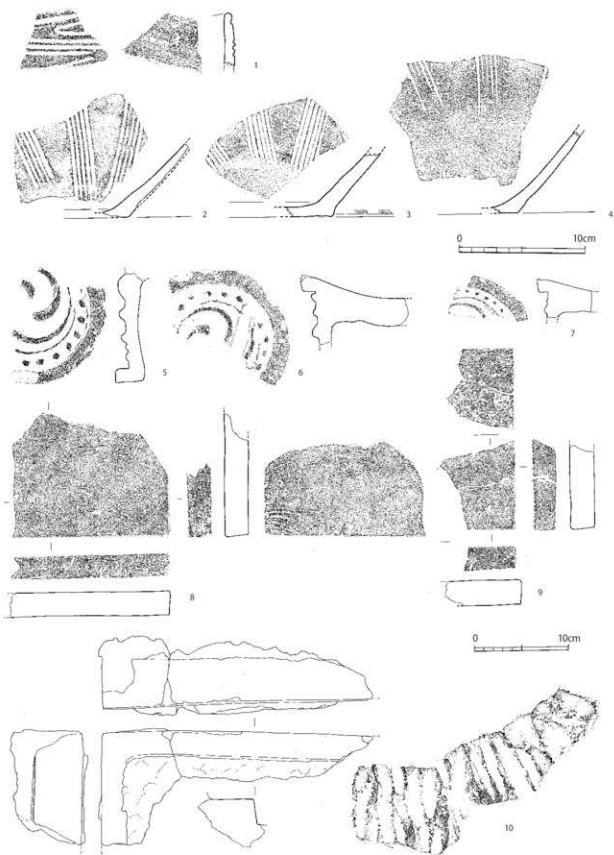
10-SK255aの平面形態は半楕円形で、その規模は東西1.5m、南北1.5m、深さ0.25mを測る。遺構の北側は近年の擾乱によって破壊されている。埋土中から土器片が少量出土した。10-SK255bの平面形態は楕円形で、その規模は東西1.5m、南北3.3m、深さ0.6mを測る。南西部はコンクリートの基礎があるため、未掘である。埋土下位から底面近くで、土器片や瓦片が出土した。10-SK255a・10-SK255bとも、出土遺物から遺構の年代はⅢ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定される。



第7-190図 10-SK255a・10-SK255b実測図(1/40)



第7-191図 10-SK255a出土遺物実測図(1/3)



第7-192図 10-SK255b出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

10-SK255a・10-SK225b出土遺物（第7-191図・第7-192図）

第7-191図は、10-SK255aとして取り上げた遺物である。

1は瓦質土器土鍋で、口縁部が「く」字状に屈曲し、端部に面を設ける。内面には刷毛目状の調整、外面にはナデ調整が行われている。2は瓦質土器土鍋の底部で、内面にナデ調整、外面に格子目叩きが認められる。

第7-192図は、10-SK255bとして取り上げた遺物である。

1は縄文土器の深鉢の口縁部で、縄文時代後期の鐘崎式土器である。外面の文様は縄文がなく、沈線のみで構成されている。2～4は瓦質土器播鉢で、いずれも胴部下半部の破片である。内面に5条を一単位とする播目が認められる。5～7は軒丸瓦で、瓦当文様はいずれも右回転の巴文である。8・9は埴の破片で、8の表面には糸切り痕（コビキ痕）が僅かに確認される面がある。10は凝灰岩製の石塔類の一部と思われるもので、宝篋印塔の屋根部であろうか。目的は不明であるが、破断面に鑿状の工具で、再加工を施した痕跡が認められる。

10-SK260（第7-193図）

AB65～AC65区に位置する土坑で、遺構の面形態は不整形となる。その規模は東西6.0m、南北4.0m、深さ0.2mを測る。検出当初は1基の土坑と認識していたが、完掘状況や出土遺物の分布状況などから、複数の遺構が重複していた可能性も考えられる。遺構の北から西側には、14世紀から15世紀代に比定される5基の井戸が集中しているが、これらの井戸すべてを切って構築されている。また、北西側は近年のコンクリート建物基礎によって大きく破壊されている。埋土は暗褐色系の単一土壌で、層中に炭化物の小粒が少量含まれていた。埋土中には土器や陶磁器、瓦、礫などが含まれていたが、それらはすべてが破片であり、そのほとんどが土坑の南側に片寄って出土した。土坑の北東側からは、これらとはやや離れて15世紀代の青磁碗の底部破片が単独で出土している。遺構の性格は廃棄を目的に掘られた土坑であろう。出土遺物には、遺構の年代を示唆するものとして京都系土師器が揚げられるほか、小破片ではあるが、15世紀代に比定される中国龍泉窯系青磁の瓶があり、注目される。この瓶は優品と思われる資料で、他の遺構や包含層・整地層からの出土破片にも同一個体と思われる資料が存在している。出土遺物から、遺構の年代はⅤ期（16世紀後半）に比定される。

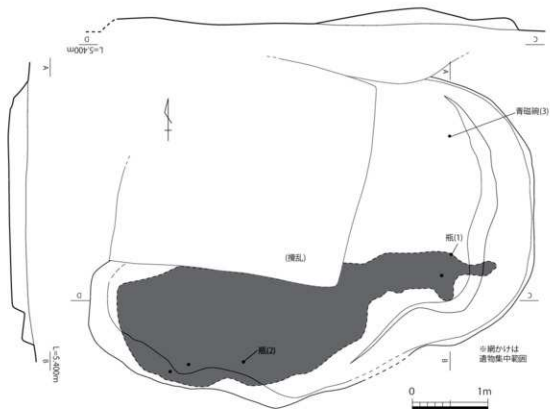
廃棄土坑

10-SK260出土遺物（第7-194図）

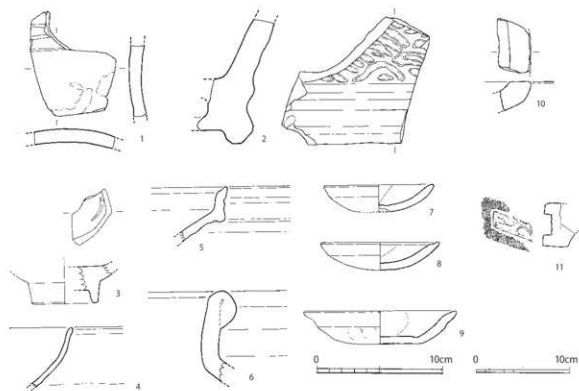
1・2は中国龍泉窯系青磁瓶で、同一個体の可能性がある破片である。1は胴部の破片で、輪が途切れている部位があり、当該部分に龍文などの貼付文があった可能性がある。2は底部付近の破片であり、外面に青海波文が認められるほか、底部と胴部の境に断面三角形の突帯が貼付されている。このような突帯のある青磁瓶は15世紀前半に比定される中国龍泉窯系の製品であることが、先行研究で指摘されている¹²⁾。3は中国産青磁碗の底部付近の破片で、見込みに片彫り文様の一部が認められる。この青磁碗も15世紀代の製品であろう。4は中国産の天目碗である。5・6は備前焼で、5は播鉢、6は大甕である。5は口縁部だけの破片であるが、その形態から中世6期から近世1期（16世紀前半～末）の製品であろう。7～9は京都系土師器の皿で、器壁が厚い16世紀後半の製品である。10は茶白の下白で、鈎部の破片。11は軒平瓦の破片である。

中国龍泉窯系青磁瓶

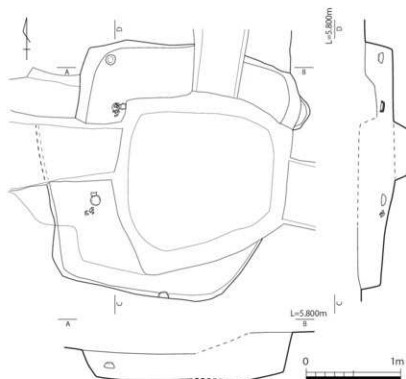
注(2)亀井明徳「首里城京の内出土陶器—15世紀前半代の標識資料として」(『明代前半期陶器の研究—首里城京の内SK01出土品—』専修大学アジア考古学研究所報告書1 2002年)9頁



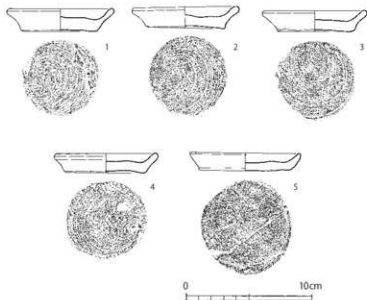
第7-193図 10-SK260実測図 (1/50)



第7-194図 10-SK260出土遺物実測図 (1/3、1/4)



第7-195図 10-SK262実測図 (1/40)



第7-196図 10-SK262出土遺物実測図 (1/4)

10-SK262 (第7-195図)

T66区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略方形となる。その規模は東西2.3m、南北2.6m、深さ0.5mを測る。遺構の中央部は近年の攪乱によって大きく破壊されている。遺構の北西および南東隅付近で完形品または大型破片の土師質土器小皿が5個体以上出土した。また、遺物の付近には白色の小礫も少量混在していた。出土遺物は土器に限られ、瓦片などは認められない。何らかの祭祀行為を反映する遺構である可能性が高いが、その詳細を明らかにすることはできなかった。出土遺物から、遺構の年代はⅡ期(14世紀中頃～後半)に比定される。

土師質土器
小皿の出土
何らかの
祭祀行為

10-SK262出土遺物(第7-196図)

1～5は土師質土器小皿で、底部外面には糸切り痕が認められる。1～4の胎土には金雲母が少量、5の胎土には金雲母が多量に含まれている。

10-SK263(第7-197図)

T61区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形となる。その規模は東西19m以上、南北24m、深さ0.4mを測る。遺構の西側は16世紀末の土坑10-SK195によって破壊されており、北側は近年の攪乱によって上面を削平されている。出土遺物の分布は土坑の中央よりは北側に偏っている傾向があり、埋土の下位に多い。出土遺物には瓦が多く認められるほか、土器片なども存在する。平瓦や丸瓦には大型の破片があるが、完形品はない。瓦の中には被熱により赤変しているものも認められた。また、埋土中には、遺物の他に河原礫や凝灰岩の破片も存在している。出土遺物から、遺構の年代はⅣ期(15世紀後半)に比定される。



第7-197図 10-SK263実測図(1/40)

10-SK263出土遺物(第7-198図・第7-199図)

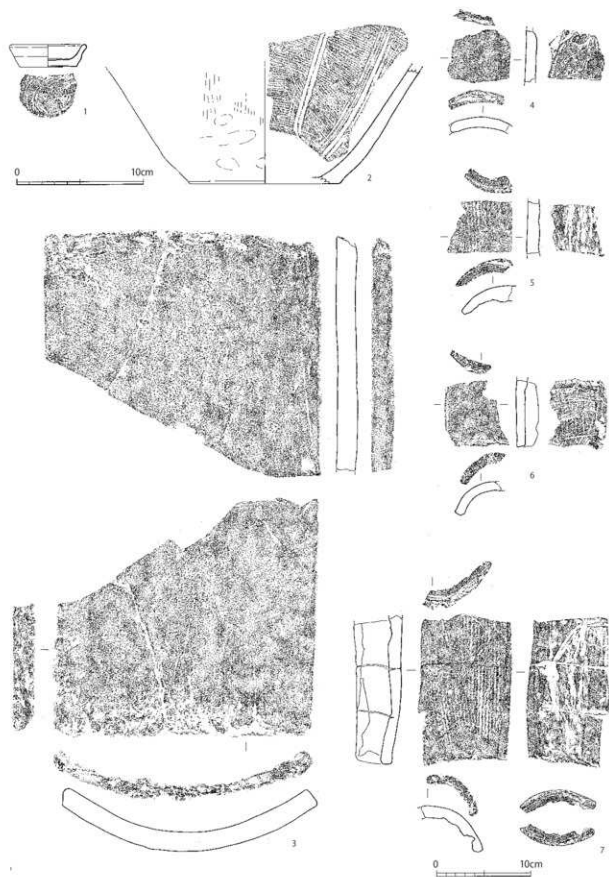
第7-198図1は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。その形態から、15世紀後半に比定される資料である。2は瓦質土器播鉢で、外面に縦方向の刷毛目状調整と指頭圧痕、内面に横方向の刷毛目状調整と2条あるいは4条を一単位とする播目が認められる。3は平瓦で、凸面には糸切り痕(コビキ痕)が僅かに観察できる。4～7は面戸瓦と推定される製品で、丸瓦を分割することで製作されたものである。第7-198図8は丸瓦の大型破片で、凸面に縄目叩き、凹面に布目痕と吊り紐痕が認められる。

10-SK265

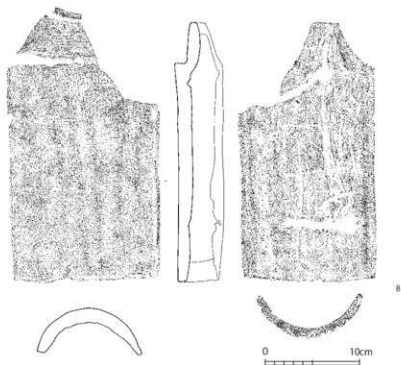
U61区に位置する大型土坑で、遺構の平面プランは半円形を呈する。その規模は東西6.6m、南北2.5m、深さ0.3mである。周辺にある時期不明の土坑を切って構築されており、遺構の北東側と南側は近年の攪乱によって破壊されている。遺構の規模に比して出土遺物の量は僅少であるが、遺構の性格は廃棄土坑と判断される。出土遺物から、遺構の年代はⅢ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定される。

10-SK265出土遺物(第7-200図)

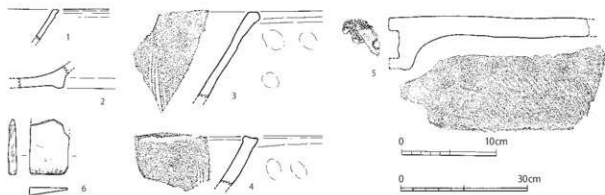
1・2は中国産の白磁碗で、1は口縁部、2は底部の破片である。3・4は瓦質土器播鉢の口縁部である。5は軒平瓦で、凹面に糸切り痕の痕跡が確認できる。6は砥石である。



第7-198図 10-SK263出土遺物実測図① (1/3、1/4)



第7-199図 10-SK263出土遺物実測図② (1/4)



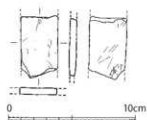
第7-200図 10-SK265出土遺物実測図 (1/3、1/4)

10-SK268

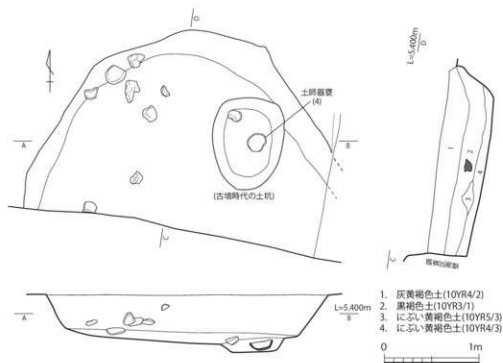
U61～V61区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形である。その規模は東西20m、南北1.2m、深さ0.3mで、北側は未調査区に伸びる。埋土は暗褐色系の単一土層で、土器片や瓦片が一定量出土した。遺物の出土状態はまとまっているが、図示可能な資料は少ない。出土遺物の中に詳細な年代を特定できる遺物がないため、遺構の年代は不明である。

10-SK268出土遺物 (第7-201図)

図示した遺物は、砥石である。図化可能な遺物は、この1点に留まる。



第7-201図 10-SK268出土遺物実測図 (1/3)



第7-202図 10-SK274実測図 (1/40)

10-SK274 (第7-202図)

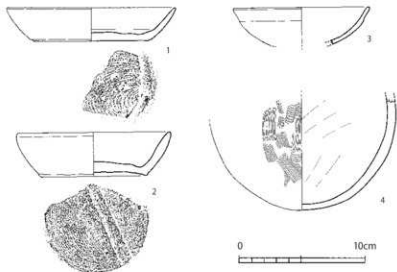
R61区に位置する土坑で、遺構の平面プランは不整形を呈する。遺構の南側は第8次調査区に伸びており、その延長部が確認されている。第10次調査区での規模は東西3.2m、南北2.1m、深さ0.5mである。埋土の下位付近から、礫や土器類が出土している。出土遺物から、遺構の年代はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～後半)に比定される。なお、遺構の東側の底面から、古墳時代の土師器甕の底部が出土した。この周囲は楕円形状に土壌の変化を認め、その範囲は東西0.75m、南北1.0m、深さ0.15mを測る。当該部分は、上面が削平を受けているものの、古墳時代前期の土坑であった可能性が高い。

古墳時代
前期の土坑

10-SK274出土

遺物 (第7-203図)

1・2は土師質土器坏で、底部外面に糸切り痕がある。3は京都からの搬入品で、京都産土師器皿Sである。4は土師器甕の底部から胴部下半部で、内面には削りが施されている。古墳時代前期の資料であるため、混入品であろう。



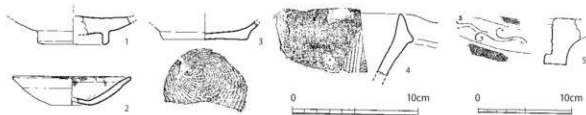
第7-203図 10-SK274出土遺物実測図 (1/3)

10-SK276

Y62区に位置する土坑で、遺構の平面プランは不整形を呈する。遺構の北側は未調査区に伸び、その規模は東西1.2m、南北0.7m、深さ0.3mである。15世紀代の井戸10-SE278の上面に位置しており、当該井戸の埋土を切って構築されている。埋土中から、京都系土師器が出土していることから、遺構の年代はⅥ期（16世紀後半）に比定される。

10-SK276出土遺物（第7-204図）

1は中国龍泉窯系青磁碗の底部で、15世紀代の製品である。2は京都系土師器皿で、口縁端部の内外面にススの付着がみられる。16世紀代に比定される製品で、遺構の年代を示唆する資料である。3は土師質土器環の底部で、外面に糸切り痕が認められる。遺構の年代と合わないので、混入品か、切り合い関係にある10-SE278の帰属資料であろう。4は備前焼播鉢の口縁部で、中世4期の資料であることから、これも15世紀代の製品である。5は軒平瓦の破片で、瓦当部の文様の一部が残存している。



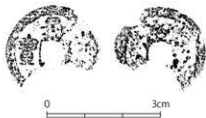
第7-204図 10-SK276出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK279

Y62区に位置する土坑で、遺構の平面プランは長楕円形状を呈する。その規模は東西2.6m、南北0.9m、深さ0.3mである。埋土は暗褐色土の単一層であり、埋土中から土器片や瓦片、銅銭が少量出土した。出土遺物が僅少であるため、遺構の年代は不明である。

10-SK279出土遺物（第7-205図）

図示した遺物は、銅銭である。欠損のため、判読できない文字があり、銭種を判別できない。図示可能な遺物はこれ1点に留まる。

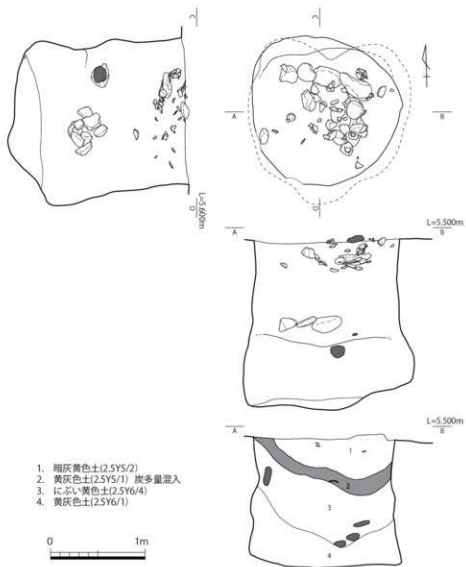


第7-205図 10-SK279出土遺物実測図(1/1)

10-SK281（第7-206図）

Y62区に位置する土坑で、遺構の平面プランは略円形を呈する。その規模は東西1.6m、南北1.6m、深さ1.8mである。遺構の断面形態は袋状を呈する。埋土は4層に分奏され、第2層には焼土や炭化物を多量に包含する。埋土の上位からは瓦器などの遺物と小型の礫や炭化物が多量に含まれる。埋土中位から下位には拳大から頭大の礫が集中する部位が認められた。最下層の黄灰色土からは礫や遺物は出土していない。旧万寿寺跡では特異な形態の遺構であり、貯蔵穴のような機能をもつ可能性が考えられる。同様な時期、形態の遺構としては、第8次調査区の08-SK300が掲げられる。出土遺物から、遺構の時期は12世紀後半に比定される。

特異な遺構
(貯蔵穴?)

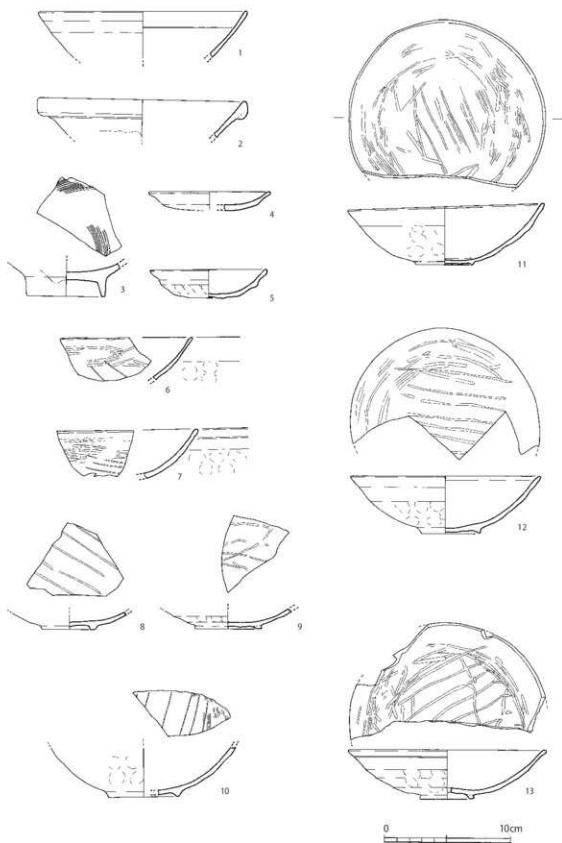


第7-206図 10-SK281実測図 (1/40)

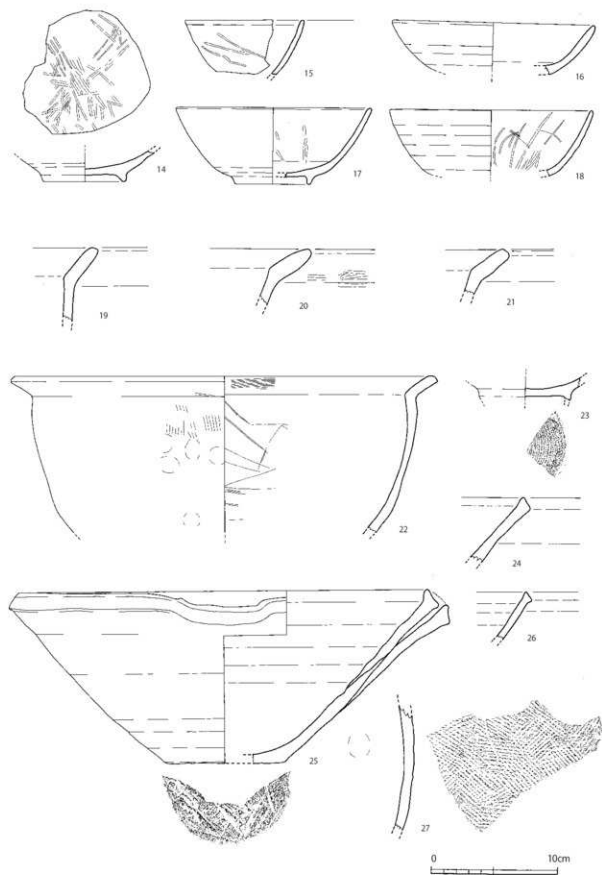
10-SK281出土遺物 (第7-207図・第7-208図)

1は中国産青磁の口縁部で、残存部は内外面とも無文となっているが、同安系青磁碗であろう。2・3は中国産の白磁碗で、2は端部が玉縁状となる口縁部、3は見込みに柳描き文がある。4・5は搬入品である和泉型瓦器皿、6～13は和泉型瓦器碗である。瓦器碗は内面にヘラミガキが行われ、底部内面のヘラミガキは平行線状になる。胴部外面下半部には指頸圧痕が認められる。14～18は在地系の瓦器碗で、底部内面が残存する14には当該部分に放射状のヘラミガキが施されている。19～22は土師質土器の土鍋で、22は「く」の字状に折れる口縁部をもち、口縁内面に横方向の刷毛目調整、頸部外面付近に縦方向の刷毛目調整、胴部外面中位から下位にかけては指頸圧痕、胴部内面には削り調整が認められる。23は産地不明の土師質土器碗で、底部には高台が付き、底部外面に糸切り痕が認められる。24～26は東播系須恵器の鉢で、25の底部外面には圧痕が認められる。27は東播系須恵器の甕で、外面に平行引き、内面に指頸圧痕が認められる。

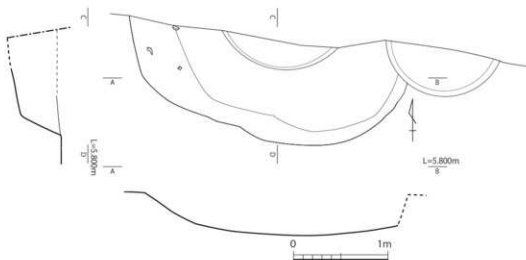
和泉型瓦器
皿・碗
在地系瓦器
碗



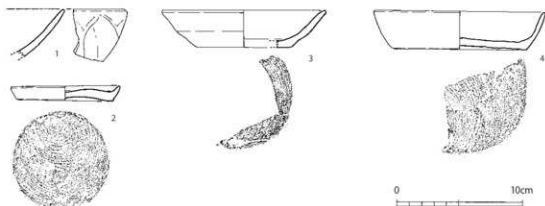
第7-207図 10-SK281出土遺物実測図① (1/3)



第7-208図 10-SK281出土遺物実測図②(1/3)



第7-209図 10-SK284実測図 (1/40)



第7-210図 10-SK284出土遺物実測図 (1/3)

10-SK284 (第7-209図)

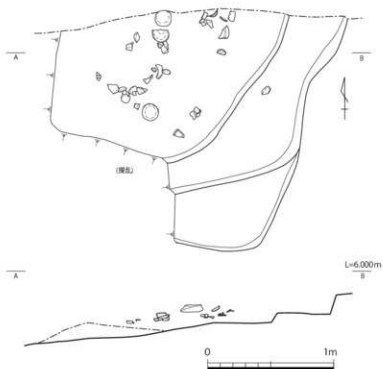
X61～X62区に位置する土坑で、遺構の平面プランは略半円形を呈する。その規模は東西2.9m、南北1.0m、深さ0.4mである。遺構の北側は未調査区に伸び、遺構の中央と東側はコンクリート管の敷設によって攪乱されている。土坑の西側の埋土中から、土器片や陶磁器片が出土した。出土遺物は14世紀代以前のものに限られることから、遺構の年代はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～後半)に比定される。

10-SK284出土遺物(第7-210図)

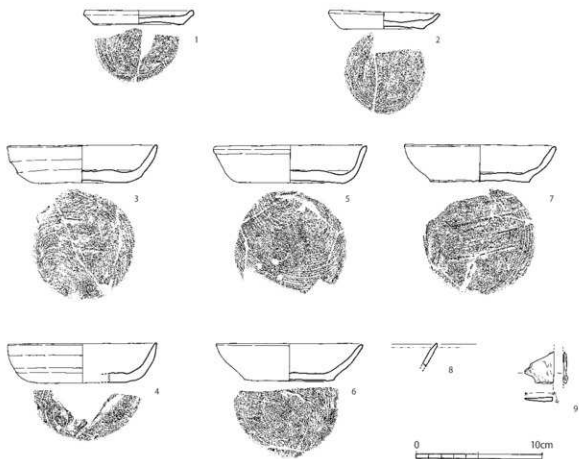
1は中国龍泉窯系青磁鍋連弁文碗で、13世紀代の製品。2は土師質土器小皿、3・4は土師質土器坏で、いずれの資料も底部外面に糸切り痕が認められる。14世紀代の製品であろう。

10-SK289 (第7-211図)

W61区に位置する土坑で、遺構の形態は不整形である。現状での規模は東西2.2m、南北1.9m、深さ0.2mである。完掘状況を見ると、3基程度の土坑が重複していることが確認できる。遺構の南西側は近年の攪乱によって破壊されており、北側は調査区外に伸びる。出土遺物は最も東側に位置する土坑からまともに出土しており、遺物の一括性は高い。出土遺物には土師質土器の坏や小皿があり、完形品や大型破片も多い。埋土は暗褐色系の単一土層で、内部に炭化物を僅かに含む。出土遺物から、遺構の時期はⅠ期(14世紀前半)に比定される。



第7-211図 10-SK289実測図 (1/40)



第7-212図 10-SK289出土遺物実測図 (1/3)

10-SK289出土遺物 (第7-212図)

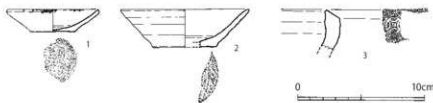
1・2は土師質土器小皿で、外面に糸切り痕が認められる。3～7は土師質土器瓿で、底部外面に糸切り痕、もしくは糸切り痕とともに板状圧痕が認められる。7については体部が丸味をもつ。8は中国産白磁で、口縁端部が口割げとなる。9は砥石の破片である。

10-SK307

T66～U66区に位置する土坑で、遺構の形態は不整形である。その規模は東西3.4m、南北2.4m、深さ0.3mで、遺構の南側は調査区外に伸びる。時期不明の土坑10-SK095と切り合い関係を有し、この土坑に切られている。出土遺物には土器片および瓦片が少量出土している。出土遺物から、遺構の時期はⅣ期（15世紀中頃～後半）に比定される。

10-SK307出土遺物 (第7-213図)

1は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。口縁部がラッパ状に開く形態を呈し、口縁端部内外面にススの付着が認められる。2は土師質土器瓿で、底部外面に糸切り痕が認められる。3は瓦質土器の火鉢類の口縁部で、外面に銭貨文の刻印が押捺されている。



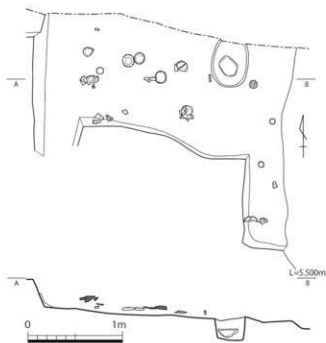
第7-213図 10-SK307出土遺物実測図 (1/3)

10-SK308 (第7-214図)

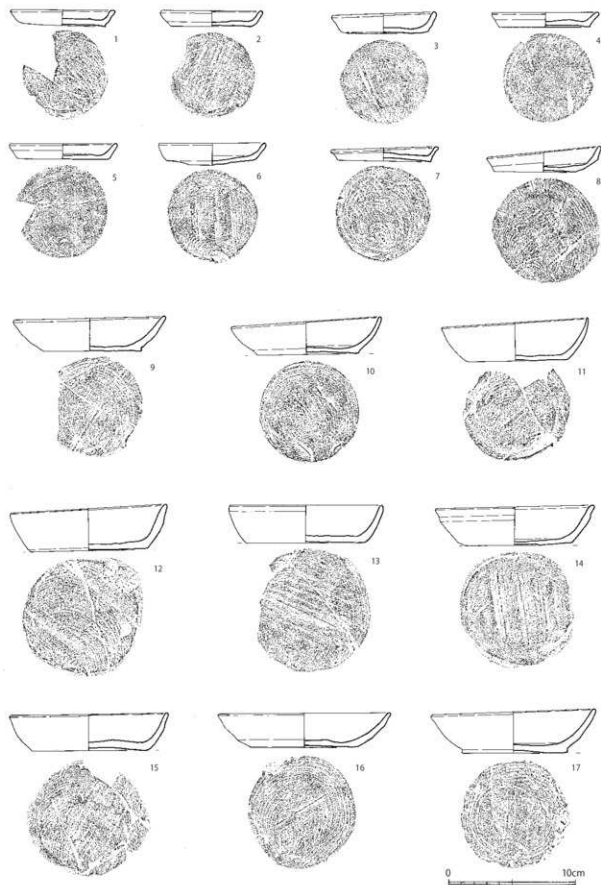
V61～W61区に位置する遺構である。近年の掘乱によって遺構の周辺が破壊されており、遺構の形態が不明となっているが、本来は土坑であった可能性が高い。東西約1.9m、南北約0.7mの範囲に完形品や大型破片を含む遺物が分布しており、遺物の分布範囲は未調査区である北側にも延長する。出土遺物は土師質土器の小皿や瓿が主体となる。出土遺物の年代観から、遺構の時期はⅠ期（14世紀前半）に比定される。

10-SK308 (第7-215図)

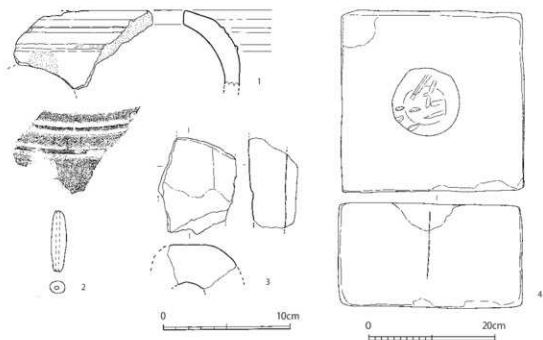
1～8は土師質土器小皿で、底部外面には糸切り痕と板状圧痕、あるいは糸切り痕のみが認められる。9～17は土師質土器瓿で糸切り痕と板状圧痕が認められる。これらは体部に丸味をもつものが多く、14世紀前半代の特徴をもつものが多い。



第7-214図 10-SK308出土遺物実測図 (1/3)



第7-215図 10-SK308出土遺物実測図 (1/3)



第7-216図 10-SK318出土遺物実測図(1/3、1/6)

10-SK318

X63区に位置する遺構である。近年の攪乱と遺構が集中して構築されている地点に位置しているため、遺構の形態が不明となっているが、本来は土坑であった可能性が高い。SK318として取り上げた遺物には土器片や土錘、石塔などがある。出土遺物から、遺構の年代はⅢ・Ⅳ期（14世紀末～15世紀代）に比定される。

10-SK318出土遺物（第7-216図）

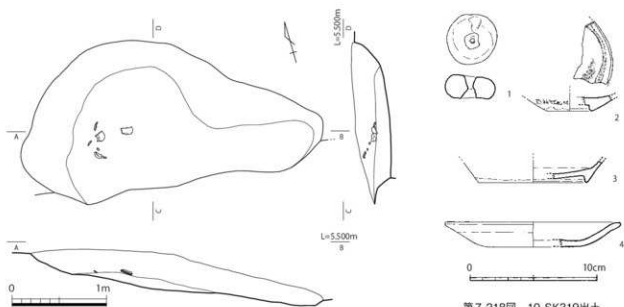
1は瓦質土器の風炉で、内湾する口縁部をもち、胴部に円形の窓を設けている。口縁部外面に断面三角形の小さな突帯をもち、突帯間に刻印による文様を押し捺す。2は管状土錘で、完成品である。3は輪羽口の破片で、断面形が多角形となり、残存部の後端部には熱変が認められる。4は石塔類の地輪で、凝灰岩製を素材とする。上面に水輪を固定するための窪み、側面には割付のための刻線が施されている。

10-SK319（第7-217図）

AC67区に位置する土坑で、遺構の平面形態は半楕円形状を呈する。その規模は東西3.2m、南北1.6m、深さ0.37mで、南側は近年の攪乱によって破壊されている。埋土は暗褐色系の単一土層で、埋土下位から遺物が少量出土している。廃棄を目的に掘られた土坑であろう。出土遺物の年代観から、遺構はⅤ～Ⅵ期（16世紀前半～後半）に比定される。

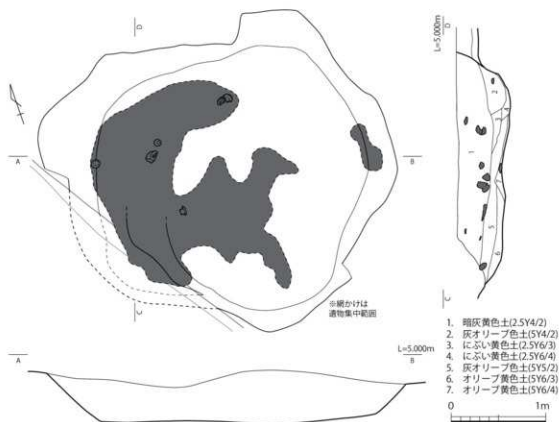
10-SK319出土遺物（第7-217図）

1は土製の紡錘車である。2は中国産の青花皿で、色調が淡黄褐色となる漳州窯系の製品である。3は中国産白磁皿で、16世紀代に比定される。4は京都系土師器皿で、器壁が薄く、古相を呈する製品である。16世紀前葉から中葉に比定される。



第7-217図 10-SK319実測図(1/40)

第7-218図 10-SK319出土
遺物実測図(1/3)

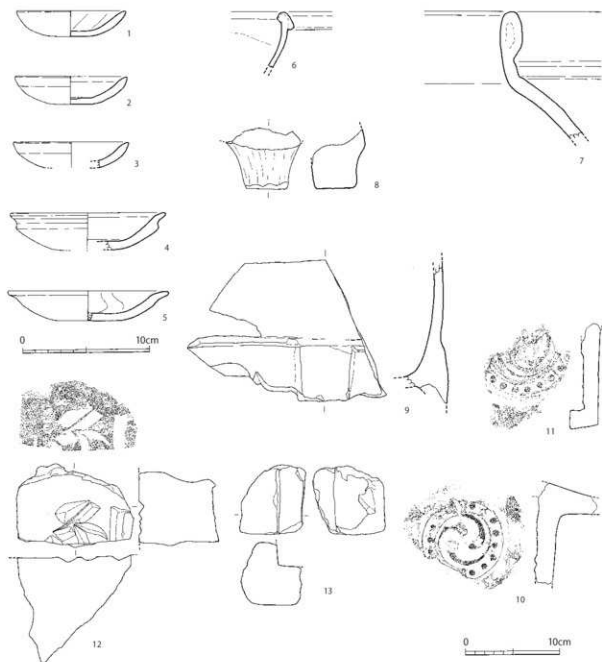


第7-219図 10-SK323出土遺物実測図(1/40)

10-SK323 (第7-219図)

AC64～AD65区に位置する土坑で、遺構の平面形態は不整形を呈する。その規模は東西3.75m、南北3.35m、深さ0.55mで、北側は時期不明の土坑10-SK209に切られており、南東側は近年の攪乱を受けている。埋土中から土器や陶磁器、凝灰岩製の石製品の破片が出土している。遺構の性格は廃棄土坑であろう。出土遺物から、遺構の年代はⅥ期(16世紀後半)に比定される。

廃棄土坑

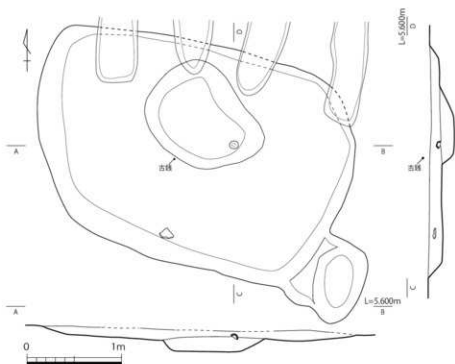


第7-220図 10-SK323出土遺物実測図(1/3、1/4)

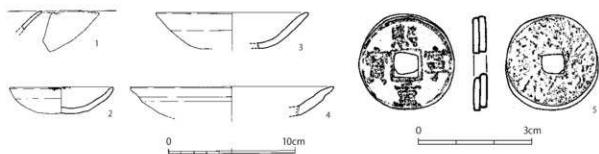
10-SK323出土遺物(第7-220図)

1～5は京都系土師器の皿で、16世紀後半に比定される。6は中国南部産焼締陶器鉢で、口縁部に肥圧面を作出する。7は備前焼大甕の口縁部である。8は瓦質土器の風炉または火鉢の脚部と思われる破片である。9は瓦質土器火鉢の胴部下半部の破片で、底部付近に脚部を有する。10・11は巴文軒丸瓦である。12は板碑の一部と思われるもので、表面に梵字が刻まれている。使用されている石材は凝灰岩である。13も凝灰岩製の石製品で、手水鉢などの破片であろうか。

板碑？



第7-221図 10-SK333実測図 (1/40)



第7-222図 10-SK333出土物実測図 (1/3, 1/1)

10-SK333 (第7-221図)

AC67区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西3.4m、南北2.35m、深さ0.1mで、遺構の北側は近世以降の小溝（耕作痕跡？）に切られている。中央よりやや北側には東西1.3m、南北1.1m、深さ0.15mの窪みがある。遺構の深さが浅いため、上面が削平されている可能性が高いが、埋土は暗褐色系の単一土層である。検出上面から銅銭、埋土中から京都系土師器などが出土した。遺構の性格は廃棄土坑であろう。遺構の年代はⅤ期（16世紀後半）に比定される。

廃棄土坑

10-SK333出土遺物 (第7-222図)

1は中国景德鎮系青磁で、皿または碗の口縁部。端部に切り込みが認められることから、口縁部は輪花となる。2～4は京都系土師器の皿である。5は初铸造年1071年の北宋銭「熙寧重寶」である。

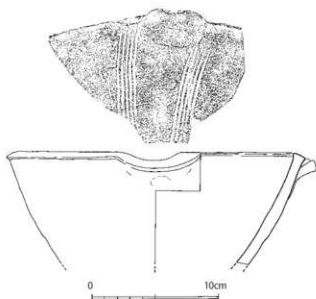
10-SK339

X66区に位置する小規模な土坑で、遺構の平面形態は略円形を呈する。その規模は東西0.8m、南北0.7m、深さ0.25mである。埋土は暗褐色系の単一土層で、遺物が少量出土している。出土遺物が僅少であるが、遺構の年代はⅢ～Ⅳ期（14世紀末～15世紀）に比定される。

10-SK339出土遺物

(第7-223図)

図示した遺物は瓦質土器楕鉢で、口縁端部に肥厚面を作出し、内面に5条を一単位とする襷目が認められる。15世紀代の製品である。図示可能な遺物は、当該遺物1点のみである。



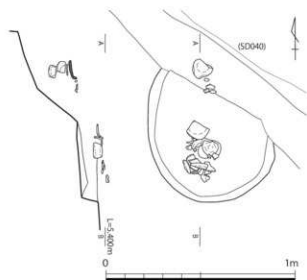
第7-223図 10-SK339出土遺物実測図(1/3)

10-SK345 (第7-224図)

AC62区に位置する小規模な土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西0.9m、南北0.8m、深さ0.15mである。15世紀後半の溝10-SD040と切り合い関係を有し、遺構の北側を当該溝の構築によって破壊されている。遺物は土坑残存部の中央付近に集中するが、10-SD040の構築によって原位置を離れた遺物が北側にも分布している。出土遺物から、遺構の年代はⅠ～Ⅱ期（14世紀前半～後半）に比定される。

10-SK345出土遺物(第7-225図)

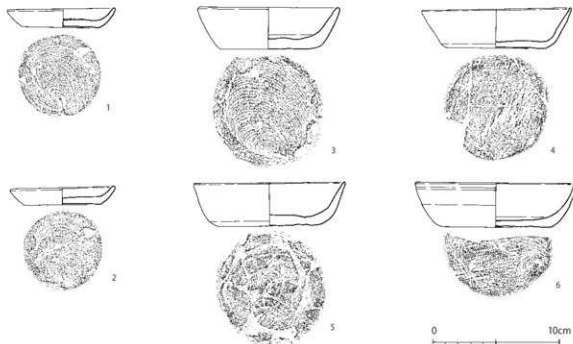
1・2は土師質土器小皿、3～6は土師質土器杯である。いずれも底部外面に糸切り痕、もしくは糸切り痕と板状圧痕が認められる。



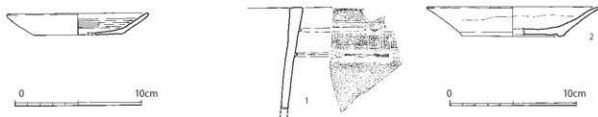
第7-224図 10-SK345実測図(1/20)

10-SK348

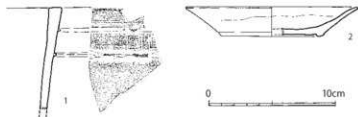
Y66区に位置する遺構で、その平面形態は溝状を呈する。その規模は東西2.3m、南北0.5m、深さ0.2mで、西端部は近年の擾乱によって破壊されている。埋土は暗褐色系の単一土層で、土器片などが少量出土した。出土遺物が僅少であるため、詳細な遺構の年代は不明であるが、Ⅴ期（16世紀前半）以降に比定される。



第7-225図 10-SK345出土遺物実測図 (1/3)



第7-226図 10-SK348出土遺物実測図 (1/3)



第7-227図 10-SK363出土遺物実測図 (1/3)

10-SK348出土遺物 (第7-226図)

図示した遺物は、土師質土器皿である。内面にロクロ目が認められる在地系の製品で、15世紀末から16世紀前半に比定される製品である。

10-SK363

AC64区に位置する遺構で、その平面形態は溝状を呈する。その規模は東西1.2m、南北0.4m、深さ0.2mで、西端部は近年の擾乱によって破壊されている。埋土は暗褐色系の単一土層で、遺物が少量出土している。出土遺物から、遺構の年代はⅥ期(16世紀後半)以降に比定される。

10-SK363出土遺物 (第7-227図)

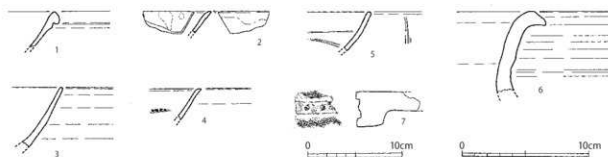
1は瓦質土器火鉢で、口縁部外面に断面三角形の小さな突帯2条を貼り付けし、突帯間に雷文を押捺する。16世紀代の製品である。2は中国南部産の白磁皿で、見込みと高台周辺が露胎となる。16世紀中頃以降の製品である。

10-SK405

Q66～R66区に位置する遺構である。遺構の切り合いが激しい地点に位置しているため、本来の遺構の形態や規模がはっきりしない。出土遺物は12～13世紀代のものが主体となるが、14世紀初頭以降の万寿寺創建時の瓦片も含まれる。遺構の状態が不良であるため、その詳細な年代は不明とおきたい。

10-SK405出土遺物（第7-228図）

1～4は中国産白磁碗、5は中国同安窯系青磁碗で、いずれも口縁部の破片である。6は産地不明の陶器壺または甕の口縁部である。7は連珠文軒平瓦で、万寿寺創建時に使用された資料である。



第7-228図 10-SK405出土遺物実測図(1/3、1/4)

3 井戸

10-SE225（第7-229図・第7-230図）

AC66～AC67区に位置する井戸である。掘形のプランは大型の略円形を呈し、その規模は東西・南北とも4.3m、深さ2.75mを測る。14世紀後半頃に比定される溝10-SD338を切って構築されているほか、東側は上面を近世以降の小溝（耕作痕跡?）によって破壊されている。検出上面から約0.5～0.8m掘り下げた段階で、拳大から頭大の大きさの礫が集中して出土した。この中には、五輪塔の火輪が含まれる。さらに掘り下げを進めると、検出面より約2.8mで凝灰岩製の板石を六角形に組んだ井筒（第7-230図）が確認された。井筒は基底部に凝灰岩製の平石を四角形状に設置し、その上に凝灰岩製の板石を縦位に使用して六角形に組上げていた。井筒部分に使用されている板石は最下段は完存しており、部分的には2段目も残存していたが、それ以上は存在していない。板石の長さは1枚が40～60cm程度であるので、構築当初は6段以上の組石が使用されていた可能性が高い。井筒に使用されていた板石の大部分は、井戸の機能停止後、抜き取られて別の井戸か別の用途に再利用された可能性が考えられる。

六角形の井筒

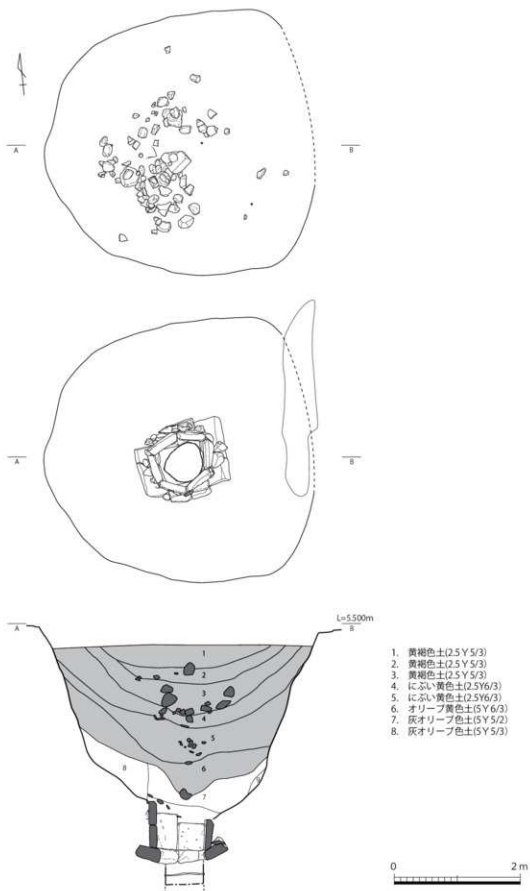
水溜部は結桶使用

石材の抜き取り痕跡

水溜部には結桶が使用されていたが、木質やタガの痕跡は明瞭に残存していたものの、遺物自体は腐朽しており、取り上げることはできなかった。水溜部に使用されていた結桶は1段（1個体）であろう。

掘形の埋土は8層程度に分層されるが、下層の7・8層と上層の1～6層の層界には、明瞭な整合面が認められる。これは井戸の機能停止後に、井筒に使用されていた石材を再利用する目的で抜き取る際に、掘形埋土を掘り返した痕跡と推定される。埋土上層からまとも出土した礫は、凝灰岩製の補強に使用されていたものであろう。

10-SE225にみられるような凝灰岩板石を六角形に組み上げて井筒を形成する井戸は、豊後府内において16世紀後半に突如として出現し、現状では実証が困難であるものの、その技術的な系譜が中



第7-229図 10-SK225実測図 (1/60)

国江南地方周辺に求められると評価されている遺構である⁽³⁾。本井戸も出土遺物から、その構築年代はⅦ期(16世紀後半)に比定される。また、この井戸の周辺に同時期の廃棄土坑(10-SK319・10-SK333)が構築されていることも注意を払っておきたい。

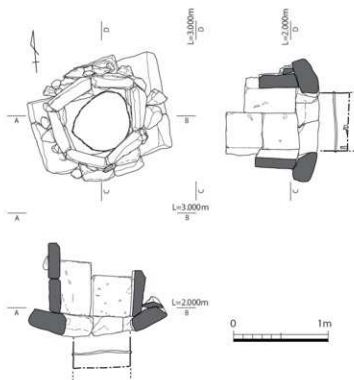
10-SE225出土遺物

(第7-231図～第7-233図)

1は中国景德鎮系青花碗で、口径がやや大振りの製品である。小野正敏分類E群中で、外底部には異体字文である。16世紀後半の製品。2は瀬戸美濃碗で、見込みに刻印による文様を有する。15世紀代の製品であろう。3・4は焼締陶器壺で、3は口縁部から肩部の破片、4は底部の破片である。いずれも16世紀代に比定される。5は中国産黒釉陶器の天目碗で、底部付近の胴部外面には「永」字の朱墨がみられる。15世紀以前の製品であると推定されるが、詳しい製作年代は不明である。6～8は備前焼の製品で、いずれも16世紀後半に比定される。6は播鉢の口縁部、7は水屋甕の胴部、8は鉢または水指の口縁部である。9は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。10～13は京都系土師器で、これらも16世紀後半の製品。10～12は皿、13は深手の坏である。11は口縁端部内外面にススの付着が認められる。14は土師質土器壺台で、口縁部を欠損する。底部外面は磨滅しているが、糸切り痕があった可能性が高い。15は瓦質土器火鉢類と推定される破片で、外面には小さな突帯と突帯下に銭貨文の刻印が押捺されている。

16～21は銅銭で、16には998年初鑄の北宋銭「咸平元寶」と1029年初鑄の北宋銭「皇宋通寶」の2枚が鑄着している。その他、銭種が判明するものとしては、初鑄造年1004年の北宋銭「景德元寶」、初鑄造年1007年の北宋銭「大観通寶」がある。

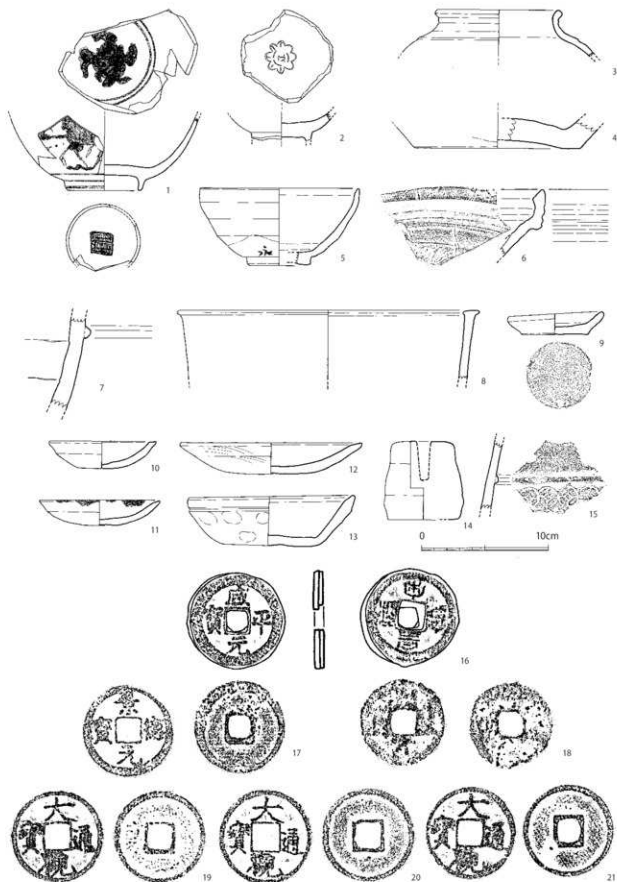
22～24は瓦埴類で、22・23は軒平瓦、24は平瓦である。25・26は石製品で、25は硯、26は砥石である。27～34は石塔類で、これらはすべて、凝灰岩を素材とする。27・28は宝塔の相輪で、外面に墨書による梵字が記されている。29は五輪塔の空風輪で、これにも外面に墨書による梵字が記される。30は五輪塔の火輪、31・32は五輪塔の地輪、33・34は五輪塔の水輪である。35は五輪塔の地輪である可能性があるが、大きく加工がなされている。



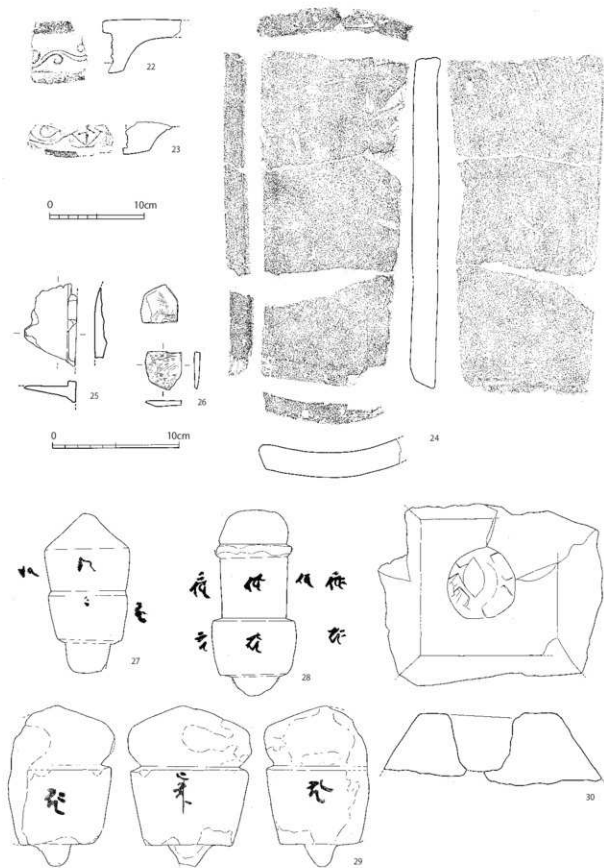
第7-230図 10-SE225井筒部分実測図(1/40)

「永」字の
朱墨

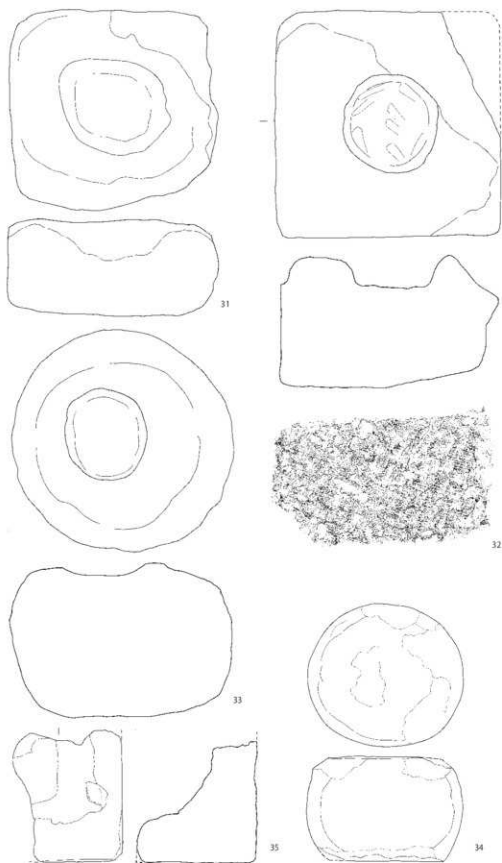
(3) 坂本嘉弘「豊後府内の六角井戸とその周辺」(小野正敏編「中東アジアにおける技術の交流と移転—モデル、人、技術」平成18年度～平成21年度科学研究補助金(基盤研究(A))研究成果報告書、2010年)



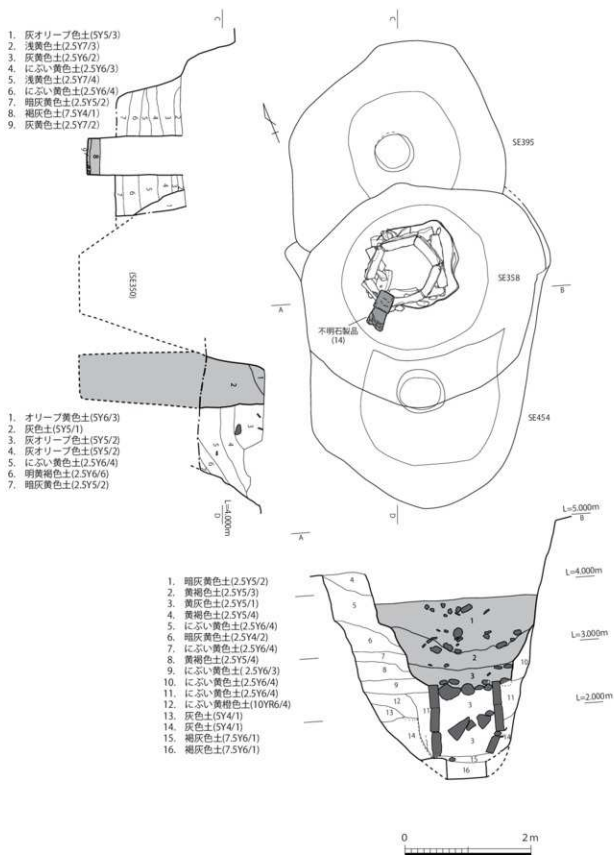
第7-231図 10-SE225出土遺物実測図① (1/3、1/1)



第7-232図 10-SE225出土遺物実測図② (1/4、1/3、1/6)



第7-233図 10-SE225出土遺物実測図③ (1/6)



第7-234図 10-SK350・10-SE395・10-SE454実測図(1/60)

10-SE350・10-SE395・10-SE454

(第7-234図・第7-235図)

AC64～AD64区に位置する3基の井戸である。これらは近接した位置に重複して構築されており、遺構の構築順序は10-SE395→10-SE350、ならびに10-SE454→10-SE350となる。また、10-SE454は南側を時期不明の廃棄土坑によって、その上面を切られている。

10-SE350

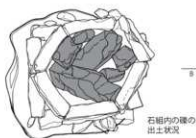
10-SE350の掘形プランは大型の略円形を呈し、その規模は東西4.0m、南北とも3.5m、深さ4.05mを測る。掘形埋土は16層程度に分層されるが、1～3層は隣接する層と整合し、その層界が明瞭である。これは井戸の機能停止後に、井筒に使用されていた石材を再利用する目的で抜き取る際に、掘形埋土を掘り返した痕跡と推定される。1～3層中には拳大程度の礫が一定量出土しており、後述する井筒部分の凝灰岩板石の補強に使用されていたものであろう。また、この層からは用途不明の凝灰岩製石製品(第7-236図14)が掘形中央部に設置されたような状態で出土した。井戸の廃棄に際しての祭祀的な様相が窺えるが、それを検証することはできていない。検出面から約2.5mで、凝灰岩製の板石を六角形に組んだ井筒(第7-235図)が確認された。井筒基底底部には長方形の板石を2個程度使用して四角形状に設置し、その上に凝灰岩製の板石を縦位に使用して六角形に組上げていた。井筒部分に使用されていた板石は最下段から2段が完存していたが、それ以上は存在していない。板石の長さは1枚が40cm

用途不明
石製品の
出土

六角形の
井筒

10-SE395

10-SE395の掘形プランは大型の略楕円形を呈し、南側は10-SE350の構築によって破壊されている。現状での規模は東西3.45m、南北2.2m、深さ2.5mを測る。掘形埋土のほぼ中央に径約0.6mを測る土質の違いが認められ、これは井筒に使用されていた結核もしくは曲物の痕跡と思われる。土層断面を検討する限り、井筒に使用されていた器物を抜き取りした痕跡は認められなかった。出土遺物に周防産の土師質土器(大内系の製品)が存在することなどから、遺構の構築年代はⅣ期(15世紀後半)に比定される。



A

B

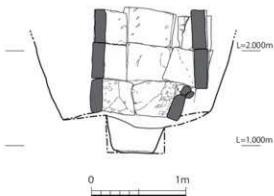


A

B

A

L=3,000m
B

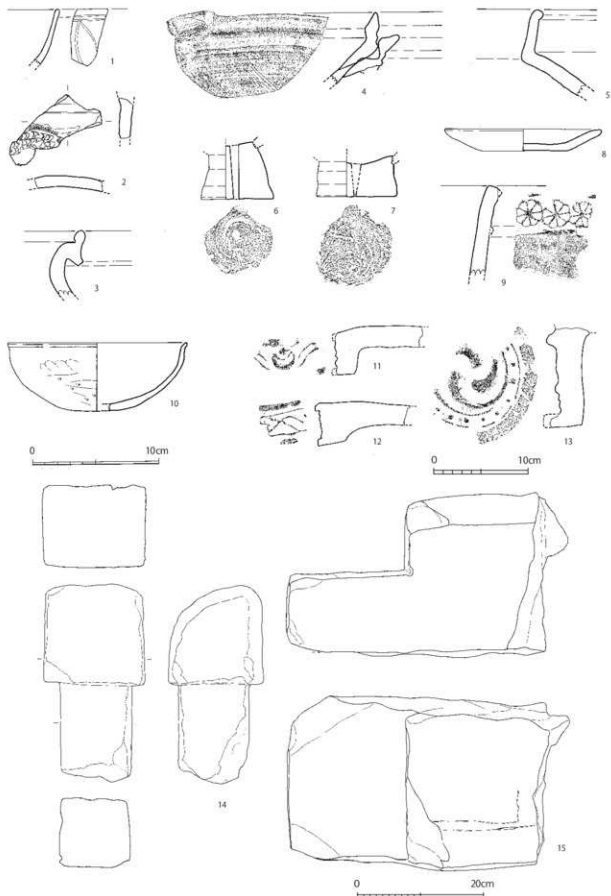


L=2,000m

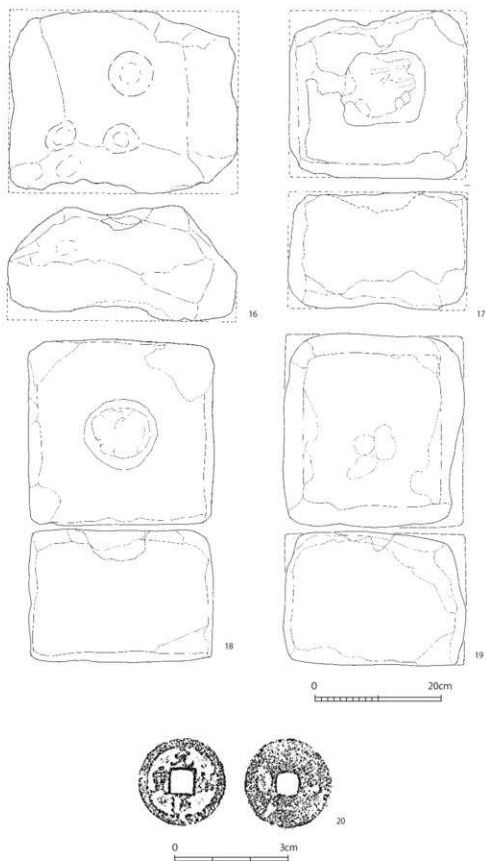
L=1,000m

第7-235図 10-SE350井筒部分実測図(1/40)

程度であるので、構築当初は8段以上の組石が使用されていた可能性が高い。残存していた井筒の内部には、加工のある大型の板石や頭大の礫が充填されるように廃棄されていた。水溜部には木質の痕跡が残っており、結核が使用されていた可能性が高いが、結核自体は腐朽しており、取り上げことはできなかった。出土遺物から、井戸の構築年代はⅥ期(16世紀後半)に比定される。



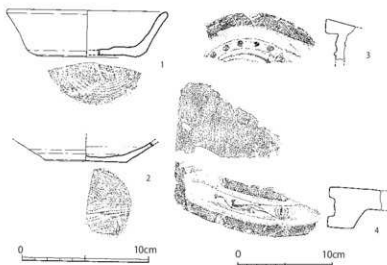
第7-236图 10-SE350出土遺物実測図① (1/3, 1/4, 1/6)



第7-237図 10-SE350出土遺物実測図②(1/6、1/1)

10-SE454 10SE454の掘形

プランは大型の略楕円形を呈し、北側は10-SE350の構築によって破壊されている。現状での規模は東西3.4m、南北2.4m、深さ12m以上を測る。掘形埋土のほぼ中央に相当する部位に径約0.6mに土質の違いが認められ、これは井筒に使用されていた結桶もしくは曲物の痕跡と思わ



第7-238図 10-SE395出土遺物実測図(1/3、1/4)

れる。出土遺物は僅少で、そのため遺構の詳細な構築年代は不明である。

10-SE350出土遺物(第7-236図・第7-237図)

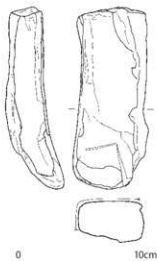
1は中国産の青磁碗で、外面に先端部が尖った連弁文が描かれている。2は中国産青磁瓶の胴部破片で、外面に龍と推定される文様が認められる。3～5は国産陶器で、3は常滑焼大甕、4は備前焼播鉢、5は備前焼壺の破片である。6・7は土師質土器燗台で、底部外面に糸切り痕が認められる。8は京都系土師器の皿である。9は瓦質土器火鉢で、口縁部外面に小さな2条の突帯を貼り付け、突帯間に菊花文の刻印を押捺する。10は土師器の鉢で、口縁部が外反し、底部付近の胴部外面には削り調整が施されている。8～9世紀代の資料と推定されるため、混入品であらう。11～13は瓦埴類で、11・12は軒平瓦、13は軒丸瓦である。14～19は石製品あるいは石塔類で、いずれも凝灰岩を素材とする。14は特殊な形態を呈する不明品で、井戸の埋土中に廃棄されていた。15は凸字状に加工がなされているが、これについても不明品である。16～19は井筒に転用されていた石材で、16は五輪塔の火輪、17～19は地輪である。20は井戸の検出上面から出土した銅銭で、初铸造年1078年の北宋銭「元豊通寶」である。

10-SE395出土遺物(第7-238図)

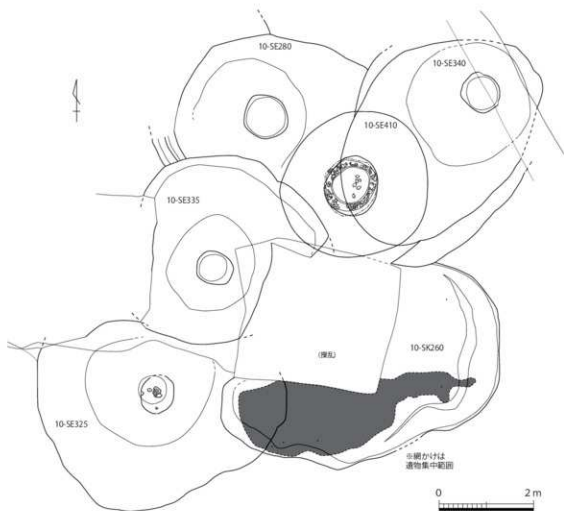
1は土師質土器坏で、底部外面に糸切り痕と板状圧痕が認められる。14～15世紀代の製品。2は器壁が薄く、胎土の色調が淡白色を呈する土師質土器皿で、周防地域からの搬入品である大内系の製品である。底部付近のみが残存する資料で、底部外面には糸切り痕と板状圧痕が認められる。15世紀中頃から後半に比定される。3は軒丸瓦、4は軒平瓦である。4の凹面には布目が残存している。

10-SE454出土遺物(第7-238図)

図示した遺物は、砂岩を素材とした砥石である。図示可能な遺物はこの1点に留まる。



第7-239図 10-SE454出土遺物実測図(1/3)



第7-240図 10-SE280・10-SE325・10-SE335・10-SE340・10-SE410実測図(1/80)

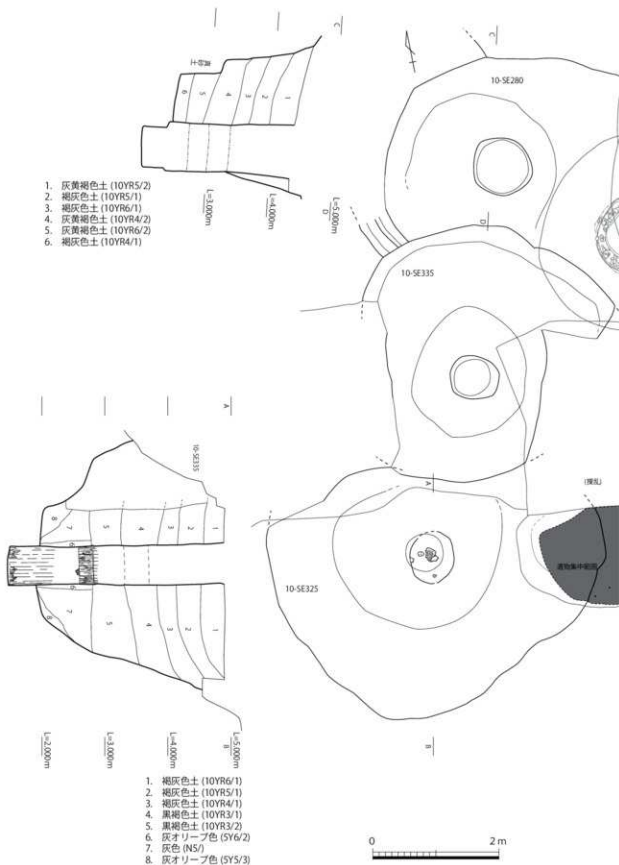
10-SE280・10-SE325・10-SE335(第7-240図・第7-241図)

AB64～AC65区には、近接した地点に5基の井戸が重複して構築されていた。切り合い関係から判断すると、最も古いものが14世紀後半の10-SE410で、最も新しいものが15世紀後半の10-SE335である。また、10-SE325の東側は16世紀後半の廃棄土坑10-SK260に切られており、さらに遺構が集中している部位に近年の擾乱が重複している。遺構の構築順序をまとめると、10-SE410→10-SE280・10-SE340・10-SE325→10-SE335→10-SK260となる(第7-240図)。

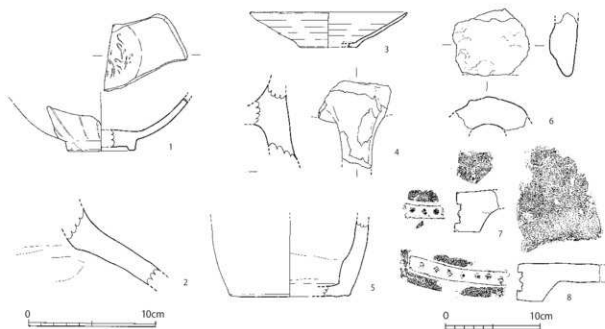
上記の5基の井戸のうち、第7-241図では下記の3基の井戸の平面図や土層断面図を図示した。

10-SE280 10-SE280の掘形プランは大型の略楕円形を呈し、その規模は東西3.7m以上、南北2.7m、深さ2.7mである。土層断面には、掘形のはほぼ中央に結桶が数段重ねられていた痕跡が明確に残っていた。結桶は井筒として使用されており、木質が僅かに残存するが、遺物としては取り上げることができなかった。井戸の機能停止後も、結桶が抜き取られた痕跡は認められなかった。掘形の埋土から、陶磁器や土器、瓦の破片が少量出土した。出土遺物の中に周防地域から搬入された白色系(大内系)の土師質土器が認められた。出土遺物から、遺構の年代はⅣ期(15世紀後半)に比定される。

10-SE325 10-SE325の掘形プランは大型の不整形円形を呈し、その規模は東西5.25m、南北3.85m以上、深さ3.1mである。土層断面には、掘形のはほぼ中央に結桶が数段重ねられていた痕跡が明確に残っており、特に最下段付近には桶と土壌の境界付近に鉄分が顕著に付着していた。結桶は井筒として使用され



第7-241図 10-SE280・10-SE325・10-SE335実測図(1/60)



第7-242図 10-SE280出土遺物実測図(1/3、1/4)

ており、特に最下段付近のものは使用された板の一枚一枚の単位が明瞭に観察できるほどに木質が残存していたが、全体としては腐朽が著しく、遺物としては取り上げることができなかった。井戸の機能停止後も、結桶が抜き取られた痕跡はない。また、井筒内部を掘り下げ中に、鬼瓦の大型破片が出土した。このほか、掘形の埋土から、陶磁器や土器、瓦の破片が出土し、出土遺物の中に周防地域から搬入された白色系（大内系）の土師質土器も認められた。出土遺物から、遺構の年代はⅣ期（15世紀後半）に比定される。

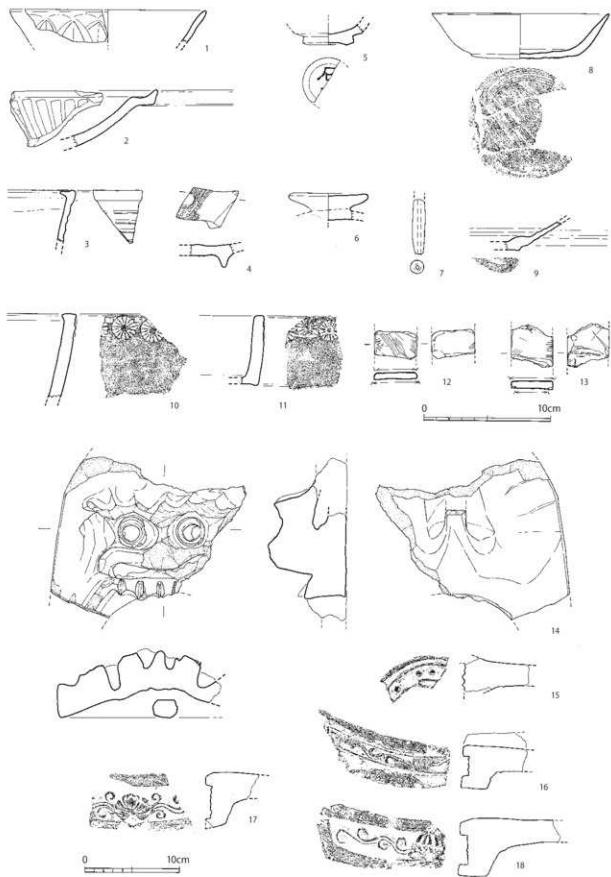
10-SE335 10-SE335の掘形プランは大型の略円形を呈し、その規模は東西4.0m、南北4.1m、深さ2.9mである。土層断面には、掘形のほぼ中央に結桶が数段重ねられていた痕跡が明瞭に残っていた。結桶は井筒として使用されており、木質が残存していたが、遺物としては取り上げることができなかった。井戸の機能停止後も、結桶が抜き取られた痕跡は認められない。掘形や井筒内から土器や陶器破片が少量出土している。出土遺物から、遺構の年代はⅣ期（15世紀後半）に比定される。

10-SE280出土遺物（第7-242図）

1は中国龍泉窯系青磁碗で、外面に鎮連弁文が認められる。13世紀代の製品。2は中国産褐釉陶器壺の肩部破片である。3は器壁が薄く、胎土の色調が淡白色を呈する土師質土器皿で、周防地域からの搬入品である大内系の製品。15世紀中頃から後半に比定される。4は瓦質土器足鍋の脚部である。5は瀬戸美濃産陶器瓶の底部から胴部下半部の破片である。6は輪刃口である。7・8は連珠文軒平瓦で、万寿寺創建時に使用されたもの。凹面には布目痕が僅かに残存する。

10-SE325出土遺物（第7-243図・第7-244図）

1～4は中国龍泉窯系青磁の青磁である。1は碗の口縁部で、外面に鎮連弁文が認められる。13世紀代の製品である。2は盤（大皿）の口縁部で、内面に連弁文が認められる。3は香炉で、口縁部外面に算本文の一部がみえる。4は鉢の底部付近の破片で、内面には印花（型押し）による魚文がみられる。5は中国産黒釉陶器天目碗の底部で、底部外面に「石口」の墨書が認められる。6は土師器の蓋のつまみ部で、混入品の可能性が高いと思われる。7は管状土錘で、上端部を欠損して

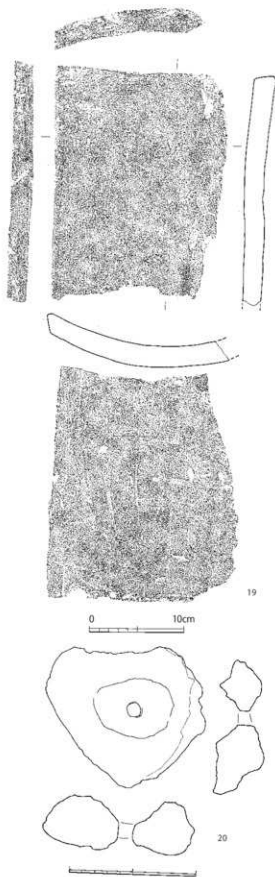


第7-243图 10-SE325出土遺物実測図①(1/3、1/4)

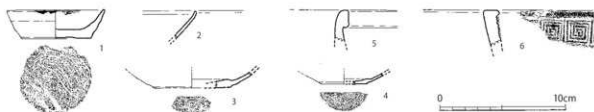
いる。8は土師質土器環で、外面に糸切り痕と板状圧痕が認められる。15世紀代の製品か。9は器壁が薄く、胎土の色調が淡白色を呈する土師質土器皿で、周防地域からの搬入品である大内系の製品である。15世紀中頃から後半に比定される。10・11は瓦質土器風炉または火鉢で、口縁部外面に刻印による菊花文が押捺されている。12・13は砂岩質の石材を素材とする砥石である。14～19は瓦埴類で、14は鬼瓦、15は軒丸瓦、16～18は軒平瓦、19は平瓦である。14の鬼瓦は、井筒の埋土内から出土した。鬼瓦としては、やや小型の製品である印象を受ける。15は巴文軒丸瓦と推定されるが、周縁部を欠損し、瓦当文様の珠文間に隙間が生じている部位が認められる。16の凹面には布目痕が顕著に残っている。20は凝灰岩を素材とする石製品で、用途不明のものであるが、中央に表裏面から穿孔が行われている。石錘などの漁撈具の一種であろうか。

10-SE335出土遺物(第7-245図)

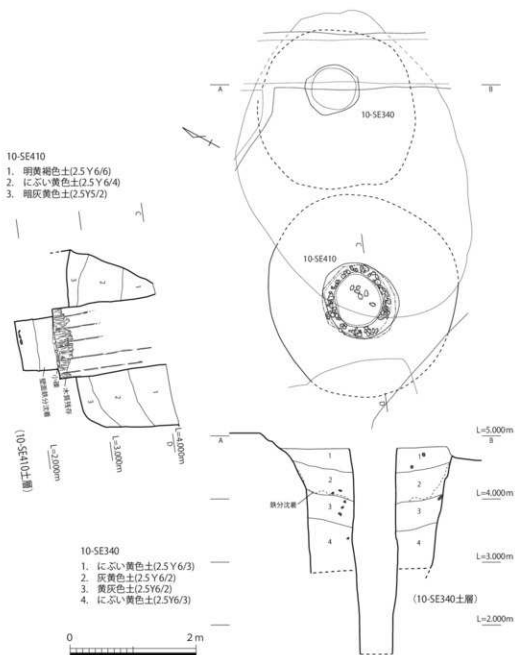
1は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕、口縁端部内外面にススの付着が認められる。15世紀後半に比定される在地系の製品である。2～4は器壁が薄く、胎土の色調が淡白色を呈する土師質土器皿で、周防地域からの搬入品である大内系の製品。この中で4は特に底径が小さいため、小皿であろう。2～4は15世紀中頃から後半に比定される。5は陶器の口縁部で、瀬戸美濃産の製品である可能性が高い。6は瓦質土器風炉または火鉢で、口縁部外面に刻印による雷文が押捺されている。



第7-244図 10-SE325出土遺物実測図②(1/4、1/3)



第7-245図 10-SE335出土物実測図 (1/3)



第7-246図 10-SE340・10-SE410実測図 (1/60)

10-SE340・10-SE410(第7-246図)

AB64～AC65区の近接した地点に構築された5基の井戸のうち、第7-246図では下記の2基の井戸の平面図や土層断面図を図示した。5基の井戸の切り合い関係や構築順序については、前項で記したので、ここでは繰り返さない。

10-SE340

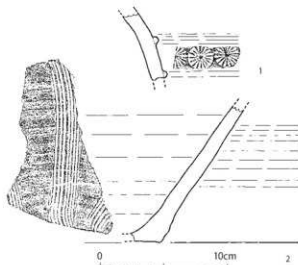
10-SE340の掘形プランは大型の略楕円形を呈し、その規模は東西3.8m、南北4.0m、深さ3.55mである。調査途中で土層観察用ヘルトが崩壊する恐れが生じたため、土層断面図の作成を途中で中断している。掘形のほぼ中央に結桶が数度重ねられていた痕跡が明瞭に残っていた。桶は井筒として使用されており、木質が残存していたが、遺物としては取り上げることができなかった。井戸の機能停止後も、結桶が抜き取られた痕跡は認められない。掘形の埋土から、土器や陶器の破片が少量出土した。遺構の詳細な時期を確定する資料は乏しいが、出土遺物から、その構築年代をⅢ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定しておきたい。

10-SE410

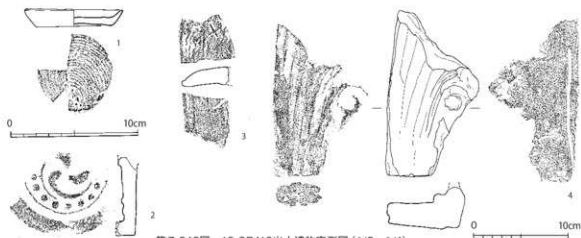
10-SE410の掘形プランは大型の略円形を呈し、その規模は東西3.0m、南北3.25m、深さ3.0mである。掘形のほぼ中央に、径約1.25mを測る井筒の痕跡が認められた。土層断面を観察すると、井筒に使用されていたのは結桶で、掘形との境界部に使用されていた板の木質が残存していた。結桶は複数個体を重ねて使用した可能性が高い。さらに、最下段に設置された結桶の下端部には小砂利を敷いており、その内側に井筒に使用されていたものとはひとまわり小さな結桶を設置して、水溜め部としていた。結桶と土壌が接する部位には鉄分の付着が観察できる。掘形や井筒の埋土中から、土器や瓦片などが少量出土した。出土遺物や切り合い関係から、遺構の年代はⅡ期(14世紀中頃～後半)に遡ると考えたい。

10-SE340出土遺物(第7-247図)

1は瓦質土器風炉または火鉢の胴部で、外面に2条の突帯を有し、突帯間に刻印による菊花文を押し捺す。2は備前焼燗鉢の胴部下半部で、内面に8条を一単位とする描目が施されている。



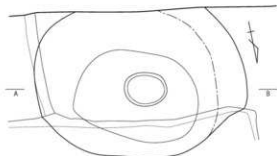
第7-247図 10-SE340出土遺物実測図(1/3)



第7-248図 10-SE410出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SE410出土遺物 (第7-248図)

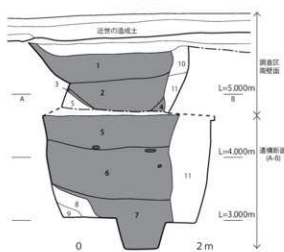
1は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。2は巴文軒丸瓦の破片である。3は丸瓦で、凹面に「×」字状の文様がみられる。4は鬼瓦の破片である。



10-SE394 (第7-249図)

Z67～AA67区に位置する井戸である。掘形のプランは大型の略楕円形を呈し、その規模は東西3.35m、南北2.25m、深さ2.8mを測る。遺構の南端部は僅かに調査区外となる。掘形の土層断面を検討すると、1～9層と10～11層に明瞭な整合面を認めた。

1～9層の分布範囲は掘形より、ひとまわり小さい。これについては井筒に使用されていた桶や曲物などを抜き取った痕跡であろう。掘形の底面には東西0.7m、南北0.5m、深さ0.5mの掘り込みが認められ、当該部分は水溜部であり、曲物などが設置されていた可能性が高いと考えられる。埋土中から、陶磁器や土器の破片が少量出土した。出土遺物から、遺構の年代は12～13世紀代に比定される。万寿寺創建期以前に比定される遺構である可能性が高い。

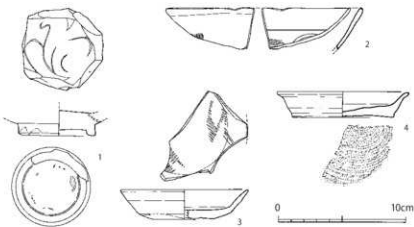


- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. 褐灰色土(10YR4/1) | 7. 褐灰色土(10YR4/1) |
| 2. 灰黄褐色土(10YR5/2) | 8. 灰黄褐色土(10YR4/2) |
| 3. 褐灰色土(10YR5/1) | 9. 暗褐色土(10YR3/4) |
| 4. にぶい黄褐色土(10YR5/4) | 10. にぶい黄褐色土(10YR5/3) |
| 5. 灰黄褐色土(10YR4/2) | 11. にぶい黄褐色土(10YR5/4) |
| 6. 黒褐色土(10YR3/1) | |

第7-249図 10-SE394実測図 (1/60)

10-SE394出土遺物 (第7-250図)

1は中国龍泉窯系青磁碗で、高台付近を残して略円形に再加工した製品である。2・3は中国同安窯系青磁で、2は碗の口縁部、3は皿である。4は土師質土器小皿で、口縁端部が外反する器形を呈し、底部外面には糸切り痕が認められる。



第7-250図 10-SE394出土遺物実測図 (1/3)

抜き取りの痕跡

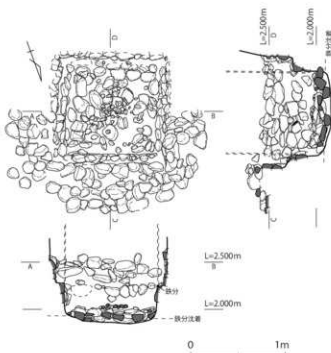
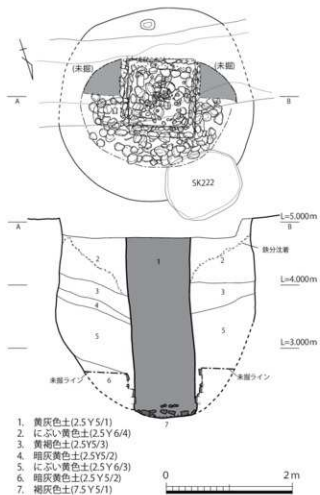
10-SE459(第7-251図)

AB62～AB63区に位置する井戸である。掘形の平面プランは円形を呈し、その規模は東西、南北とも3.0m、深さ3.2mを測る。15世紀以降の土坑10-SK222および14世紀末から15世紀前半の溝10-SD045と切り合い関係を有し、これらの遺構のすべてに切られている。

検出面から約20cm掘り下げた段階で、そのほぼ中央部から、平面プランが正方形形状を呈する一辺約1.1mほどの埋土の違いが確認された。掘形埋土は2層の上位がグライ化しており、その上位と下位の境に鉄分の付着が顕著に認められた。また、2層と3層の境も完全に整合しており、その上下で色調の違いが認められた。掘形埋土は6層に分層され、それぞれに炭化物が少量含まれていた。

平面プランが正方形形状の埋土は、井筒の痕跡と想定され、その形状から本遺構は「方形縦板組隅柱横棧形」に分類される井戸であることがわかる。しかしながら、井筒部分の土層に隅柱が立てられていたことや縦板が使われていたことなどの痕跡、さらに井筒壁面に残存する木質などについては、明確には確認できなかった。検出上面から約2.4m掘り下げると、掘形の下段に拳大の礫が敷かれてい

方形縦板組
隅柱横棧形



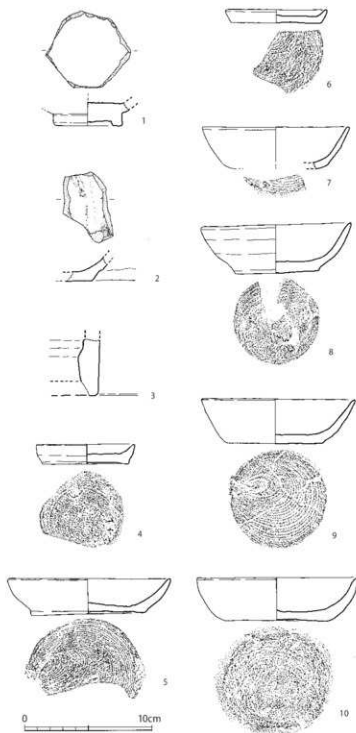
第7-251図 10-SE459実測図(1/60, 1/40)

る状況がみられた。また、さらにその下位にはひとまわり小型の規模で礎を並べて水溜め部を形成していた。その規模は一辺約1.0mを測る。水溜め部の底部にも礎や小砂利が敷き詰められており、礎が接する底面には鉄分が沈着していた。井筒に起因すると思われる土質の違いは、井戸の掘形埋土のほぼ上面まで認められるため、井筒に使用された木材が再利用のため抜き取られた痕跡は確認できない。掘形や井筒の埋土中からは、陶磁器片や土器片が出土している。出土遺物から、遺構の年代はI期(14世紀前半)に比定される。

10-SE459出土遺物

(第7-252図)

1～5は掘形の埋土、6～10は井筒の埋土から出土した資料である。1は中国龍泉系青磁碗で、高台部周辺を残して略円形に加工した製品。2は中国産陶器で、黄釉鉄絵盤の底部である。内面には鉄絵文様が認められる。3は瀬戸美濃産陶器梅瓶の底部付近の胴部破片である。4～10は土師質土器で、4・6は小皿、5・7～10は坏で、いずれも底部外面に糸切り痕が認められる。



第7-252図 10-SE459出土遺物実測図(1/3)

10-SE233 (第7-253図)

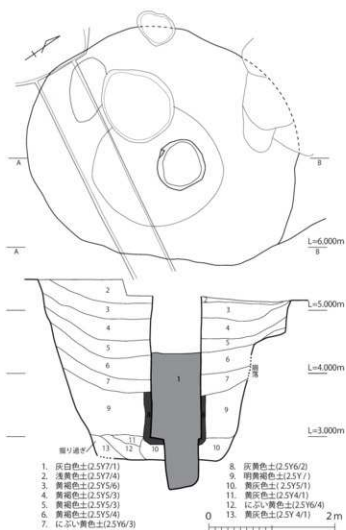
X64区に位置する井戸である。掘形の平面プランは楕円形を呈し、その規模は東西4.25m、南北3.65m、深さ3.0mを測る。時期不明の土坑10-SK078など、周辺の遺構と切り合い関係を有し、これらのすべてに切られている。検出面から約25cm掘り下げた段階で、そのほぼ中央部から平面プランが略円形を呈する径約0.8mほどの埋土の違いが確認された。この部位は井筒の痕跡と推定され、

掘形埋土との境界部分には木質が残存する部位があった。掘形埋土は11層程度に分隔され、特に9層には井筒埋土の境界部分に鉄分が顕著に付着していた。井筒や水溜部に使用されていた木製品が結構なのか、曲物なのかは判断がつかなかった。出土遺物や切り合い関係から、遺構の年代はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～後半)に比定される。

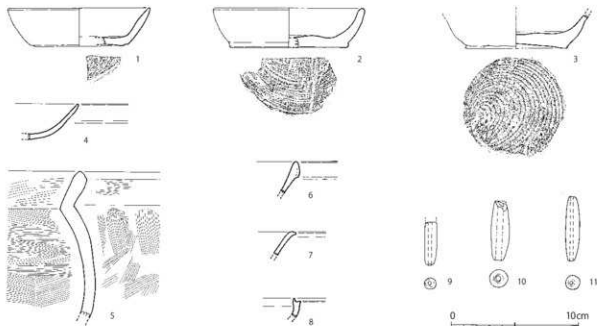
10-SE233出土遺物

(第7-254図)

1～3は土師質土器環で、底部外面に糸切り痕が認められる。4は京都産土師器の皿Sである。5は古墳時代の土師器甕で、混入品である。6～8は中国産の白磁で、6・7は碗の口縁部、8は合子の口縁部で、いずれも12世紀代の製品。9～11は管状土鍾である。



第7-253図 10-SE233実測図(1/60)



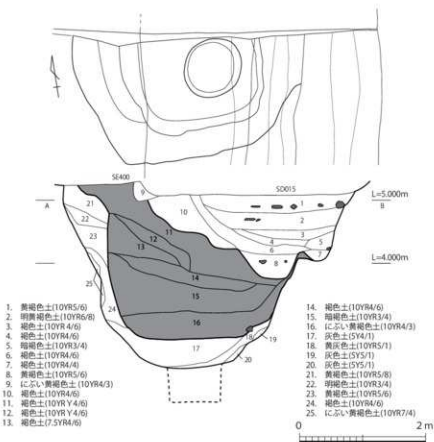
第7-254図 10-SE233出土遺物実測図(1/3)

10-SE400

(第7-255図)

Q65 ~ Q66

区に位置する井戸である。この地区は遺跡の保存のため、遺構面の掘り下げを十分に行っていない地点であったが、当該部分は道路施設の建設によって破壊されるため、完掘を行った。現状での遺構掘形の平面プランは半楕円形状を呈し、その規模は東西4.25m、南北3.65m、深さ3.0mを測る。

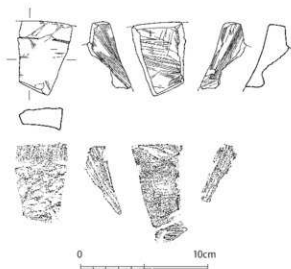


第7-255図 10-SE400実測図(1/60)

16世紀後半の溝10-SD015と切り合い関係を有し、この溝に切られている。土層断面図によると、井戸の埋土は16層程度に分層され、9～16層と17～24層の境界には明瞭な整合が認められた。この9～16層については、井筒に使用されていた木製品を抜き取る際に、掘り埋土を掘り返した痕跡と推定される。井戸の底面からは径約0.9mを計る円形の掘り込みが認められ、これは井筒と水溜部の痕跡と推定される。当該部分に木質が僅かに残存していたが、それが結核なのか、曲物なのかは判断がつかなかった。切り合い関係から、当該井戸は16世紀後半以前に構築されたものであるが、出土遺物が僅少で、遺構の詳細な年代を判断する資料に乏しい。

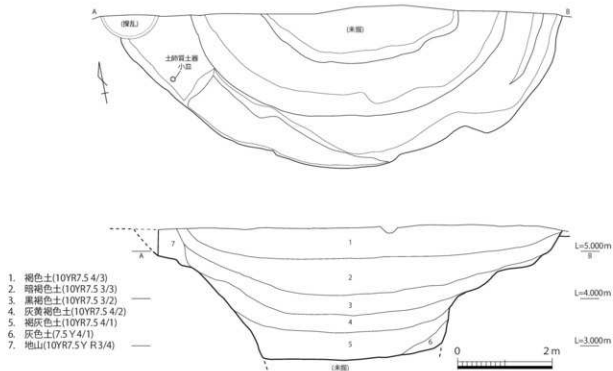
10-SE400出土遺物(第7-256図)

図示した遺物は、滑石製石鍋の破片である。破断面に鋸引き状の条線が認められる。



第7-256図 10-SE400出土遺物実測図(1/3)

抜き取りの
痕跡



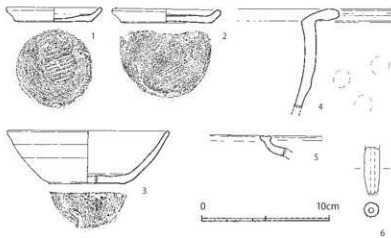
第7-257図 10-SE250実測図(1/80)

10-SE250 (第7-257図)

X62～Y62区に位置する井戸と推定される遺構である。その掘形は現状では半円形を呈し、東西4.7m、南北1.65m、深さ1.4m以上を測る。遺構の北側は未調査区に伸び、西側はコンクリート支柱の建設で破壊されている。これ以上の掘り下げを進めると、調査区の壁面が崩壊する恐れが生じたため、埋土の掘削を途中で中断している。掘り下げた範囲内では、井筒の痕跡などを確認することはできなかった。遺構の埋土中より、土器片や陶器片、土鍾などが出土した。出土遺物より、遺構の年代はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～後半)に比定される。

10-SE250出土遺物(第7-258図)

1・2は土師質土器小皿で、底部外面には糸切り痕と板状圧痕がある。3は土師質土器坏で、器高が高く、底部外面に糸切り痕が認められる。4は土師質土器土鍋で、5は産地不明(中国産か?)陶器壺類の口縁部である。6は管状土鍾である。



第7-258図 10-SE250出土遺物実測図(1/3)